

---

# ダークマジシャン-2nd stage-

霸王樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダークマジシャン - 2nd stage -

### 【Nコード】

N7509X

### 【作者名】

霸王樹

### 【あらすじ】

主人公のザックスは英国系日本人であり幼いころにイギリスの武器として体に特殊能力を組み込まれていた。ザックスとミイナにとってイギリスは危険とボスに言われ2人は日本へ引越すことになった。しかし、そんな情報はすぐに漏れていて日本で待っていたのは術者狩りというザックスたちを狙う組織だった。そんな中ザックスとミイナは日本で実験された術者4人と出会う。ザックスたちの運命はどうなるのか？

## 第0話（第30話） プロローグ

プロローグ。

下記は1期のネタバレがあるので読んでいない人は

<http://ncode.syosetu.com/n8344w/>

舞台はイギリス。

主人公のザックスはイギリスの戦争の兵器のため幼いころに体に特殊能力を組み込まれた。戦争により亡き恋人マリがザックスの身代わりで死んだあとザックスは旅を成功させればマリに会えるということを知り旅を始めた。

2

最初はキリヤという幼馴染と始めたが色々人を助けていくとルメリ、テイト、ミイナと一緒に旅をすることになったがそこには術者狩りというザックスたち術者の力を悪用に使用するため必要とする人物が沢山いる。

そんな術者狩りを倒していきながらもザックスは無事に亡き恋人マリに出会うことが出来た。

辛い別れの中ザックスたちは村に変えるとお互い自分たちの道を進むことにした。

そんな中ザックスとミイナはボスの薦めにより安全な日本へ行くこ

とになった。

そこには新しい仲間や出会い。

そしてザックスたちを待っているものは・・・

まもなく投稿開始！！

## 第1話（31話） 新たなる日々（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを入れて宜しくお願いします。

はい第2期もやっていきまーす。 多分11月の中旬ぐらいで終わるかな・・・

第1部読んでいない人は第1部からがいいと思います。詳しくはブログで！！

## 第1話（31話） 新たなる日々

### 1話

ロンドン・ヒースロー空港

「それじゃあ気を付けてね。ときどき連絡してよ。あ、あとそのスマートフォンの使い方大丈夫？」

とキリヤは聞いてくる。

「大丈夫なんじゃない？」

と俺は適当に答えると

「大丈夫だよ！キリヤ もう、私がいなくなっているから」

とミイナは言う。

「ザックスさん。決してミイナさんには手を出さないように。」  
とテイトは注意深く言う。

「わかってるって！そんなことするわけないだろう！」  
と答える。

「ザックスさん、体の方には気を付けて！」  
とルメリは言う。

「ああありがとう。」

「ザックス！あんたロリコンとは知っていたけど一緒に2人だけでクラスとなると結構心配だな・・・」  
とマリヤは言う。

「うるせえな。大丈夫だって言ってるだろ。」

・・・

「それじゃあいつてきまゝす」  
とミイナは言う。

「じゃあな おまえら」

と俺はいい パスポートコントロールをくぐっていった。

そうこれは1か月前だった。

「ザックス。よく帰ってきたな」  
とボスは言う。

「ありがとよ、ボスさん。 おかげであいつにも会えることが出来て俺は良かった。」

「そうか、ならばよかった。しかし、今回お前さんの行動で世界中は君を欲しがっている。

特にこのイギリスはな、だからザックスに私は任務を与える。

そう、日本でしばらく暮らしておくれ、手続きは俺の知り合いの大

学の教授に任せておいた。

引っ越しは明後日から行う。そして悪いがミイナも一緒にだ。あいつの力もどうやら狙っているらしい。」

「はいはい。」

と俺はいつもの癖で返事してしまう。

「つておい！な・・・なんていった？　日本？日本へ引っ越し？しかも引っ越しは明後日から？え？  
しかも　withミイナつて・・・　え？おれとミイナが日本で暮らすの？」

「ああそうだが？」

「ええ？なんで？」

「ああ大丈夫、君とミイナは日本の学校に行ってもらうことになる、頑張るんだぞ。」

「話聞け」

家

「ただいま。」

「おかえりーザックス。聞いたよ聞いた。私達一緒に日本に行くんだよね？」



「お前、どこから、」

「今日ボスに聞いたの 私楽しみ」

・  
・  
・

・  
・  
・

という訳で俺たちは飛行機の中。

日本へ向かっていた。

成田空港。

「うわあすげえ 全部日本語だ・・・」

とザックスは言う。

「すごいすごい！日本人ばっかだ！」  
とミイナは言う。

そうすると後ろから女の人が出てきた。

「すみません、海藤君と吉川さん？」

俺はあまり慣れてない名前で呼ばれたので少し反応が遅かった。

・  
・  
・

・・・

## 大学研究室。

「はじめまして、私は特殊能力研究の教授　春田<sup>はるた</sup>　南<sup>みなみ</sup>　あなた達のお世話をしていくことにもなるわ。」

「あ、俺は　ザ・・・じゃなくて　海藤　考樹です。」  
「私は吉川　由紀です。」

「そう、それでいいの」  
と春田は言う。

「これから学校にも行くことになるからなるべくそっちの名前を使ってね。」

それともう一つ約束してほしいことがあるの・・・」

・・・

・・・

わたしは普通の学校に行っている女子高校生の2年生。

でも私は普通じゃないの。少し変わっていて・・・

実は特殊能力を持っていたりするの

・・・

・・・

「おはよみづき 美月 今日も元気いい？」

と話しかけてくる友達の優香。

私は 小鳥坂ことりざか 美月みづき よく小鳥いとかも呼ばれる。

さつきも説明したけれど 普通の高校に言っている女子校生

今日は新学期。新しい転校生とかも来るから楽しみってなわけだったが、まさかこうなるとは思っていなかった。

## 学校

「えーつと名簿と名簿」

新しくクラスも変わったのできちんと見ておいた。

そこに見たいことのない名前があったことに気付いた。

「海藤 考樹？（かいどう こうき） このひと転校生かしら・・・

」

「みづき 何見てるの？ まさか転校生を狙ってるの？」

「な・・・なに言ってるのよ？ まさかそんなことするわけないでしょう。」

「だよね」 実は、その転校生って超イケメンらしいよ。」  
「え？」

まさか転校生が特殊能力を持っているなんてしらずに。

## アパート

「よし、お前はここの学校にいくんだぞ。多分イギリスの時と変わ  
りないともうがな。」  
とザックスは言う。

「うん、わかった」

とミイナはいい、家を出て行った。

・  
・  
・

ザックスが学校に向かう途中。

「しかし、聞いていたが、日本の学校は歩いたり自転車を使って  
登校するのか・・・」  
という。

その時かすかに、こんな声を聴いた。

「ザックス・アンドレスの身元を確認」

しかし、俺は気のせいだと思い無視していった。

・  
・  
・  
・

学校

キンコーンカーンコーン

とチャイムが鳴る。

俺は後ろの方の真ん中の席に座っていた。

すると、後ろに座っている男に声をかけられた。

「君が海藤くん？はじめましてだね。」  
と優しく声を掛けられる。

「あ、ああ海藤です。」  
と答える。

「どこの高校から来たの？」  
と聞かれるが答えられない。  
「えつと・・・遠い方の・・・田舎の高校かな・・・」  
と適当に俺は答えた。

「そつか。俺は斉藤 楓太 よろしく。」

「ああ、よろしく」

キンコーンカーンコーン

ともう一度チャイムが鳴る。

「はい、今日から担任の橋澤 はしざわみゆき 美由紀です。よろしくです。」  
と担任の女の先生が言う。

・  
・  
・

キンコーンカーンコーン

とチャイムが鳴り今日は始業式だったので半日で終わった。

俺はそのあと先生に呼び出されいろいろと学校を説明してもらった  
後に下駄箱へと向かった。

そして靴を履きかえていた。その時

「ちょっと、いいかしら。」

と声を掛けられた。よく覚えていないが、なんかクラスにいたような顔だった。

「今日、一緒に帰ってもいいかしら。」  
と聞かれた。

「なんですか？いきなり逆ナンパですか？」

と言う

「何を言ってるの？ 妄想し過ぎよ!」  
と答えられた。

・・・

・・・

そして俺とそいつは一緒に帰っていた。

「ところでなんだ？話つて。」

「ああ話ね。まず自己紹介しないと。私は小鳥坂 美月。あなたは海藤 考樹だよね?」

「ああそうだが?」

「そう、ならOKだね。じゃあ単刀直入に聞くわ。」

「おう」

「あんた、特殊能力の持ち主だよな?」

「特殊能力?なんだそれ? なんか物を浮かばしたりとか? そんなのできねえよ」

「あんた隠しても無駄だよ。無駄!」

「なんで隠すんだよ?そんなもの 言ってみてくれよ」

「そんなの決まってるじゃない・・・あれっ・・・あれわ・・・」

「どうしたんだいきなり」

と俺が聞いた瞬間、小鳥坂は俺をつかんで走って行った。

・  
・  
・

「なんだよ？急に」  
と俺は聞く。

「あんたね・・・大丈夫かしら。。 あれは術者狩り（マジシャン・ハンター）よ・・・」

「術者狩りだと？ 日本にもいるのか？」

「ええ、でもあいつらは撤退したはずだわ。 あっいけない、この後塾があるんだった・・・」

あんたも術者狩りには気をつけなさいよ。」

と言って帰って行った。

俺もすぐに家へと戻った。

・  
・  
・

家の前に着くとミイナが扉の前で待ってた。

「もお遅かったじゃん！」



「わりいな。俺も遅くなっただから。」

と扉を開けようとした時、新聞受けに手紙が入っていることに気付いた。

「誰からだ？」

と俺は手紙を開けて内容を読んだ。

『宛て：ザックス・アンドレス』

お前がここに住んでいることは間違いないだろう。

もし、お前がザックス・アンドレスなら団地の前の公園に7時に姿を現せ。』

と書いてあった。

「誰から手紙？」

とミイナは聞いてくるが

「ああ教授からだ。」

と俺はうそをつく。

そして7時

公園へと向かう。

## 第2話（32話）公園（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを書いてください。

## 第2話（32話）公園

俺は公園へ向かった。

すると急に後ろから気配を感じた。

「誰だ!？」

と俺は叫ぶ。

「さすがだな。ザックス・アンドレス。」

と現れたのは一人の男と2人の女だった。

「俺らは今からお前を殺す。」

と男は言う。

「ちょい待てよ!なんで俺が?お前らは術者狩りか？」

と俺は言う。

「術者狩りじゃないんだ。ただ、お前に恨みがあるだけだ・・・」

と男は言うつと襲ってくる。

相手は光術師だった。

「お前ら卑怯じゃねえか? 3VS1はないだろ?おい!」  
とザックスは言う。

「お前が死ぬことには変わりないんだ・・・」

と男は言う。

「ucci・・・お前ら・・・怪我してもしらねえぞ・・・」  
とザックスは言うくと3人を吹き飛ばす。

「なんて威力なの!？」

と女は言う。

「てめえら 恨みがあるだろうがなんだろうがしらねえが・・・  
ここで言ってもらおうじゃねえか」

とザックスは言う。

「言う前に俺らはお前を殺すんだよ!」

ともう一人の男はいい襲ってくる。

「近づくな!」

とザックスはいいその男を飛ばす。

「そんなの・・・あなたに分かるわけがないじゃない!」

と女は泣きながら言う。

「お前は・・・俺の姉ちゃんを・・・」

と男は言う。

3人とザックスは戦いを止めて3人はザックスに話し始めた。

「当時は術師なんて珍しかった。なんで俺たちが術師かというと・  
・日本人がイギリスの技術を使用しようとして俺たちを使った。

それが俺たち4人だった。

4人というのは 有理姉ちゃんと俺、裕太と透哉と綾乃だ。」

と裕太は話す。

「おいおい、待てよ・・・ 有理って・・・まさか・・・」  
とザックスは言う。

「そのまさかだよ。俺の姉ちゃんはお前が知っているマリっていうやつだよ。

姉ちゃんは俺たちの中でも強かったんだ。術者って言っても俺たち4人しかいなかったんだ。だから術者狩りに狙われてもおかしくなくていつも4人で行動していたんだ。学校でもばれないように頑張ってきたんだ!!

でも5年前に姉ちゃんはイギリスから成功作って言われて姉ちゃんはイギリスに送られた。

俺たちは失敗作。失敗はイギリスに必要とされなかった。本当は俺たちもイギリスに行くはずだったんだが。」

「私だって別れたくなかったもん。」

と綾乃は話し出す。

「有理ちゃんと一緒だったから・・・ここまで生きてこれたのに・・・」

「俺たちは姉ちゃんを遠い日本から見守っていた。だけど2年前だった・・・俺たちはイギリス政府から姉ちゃんは戦死したって聞いたんだ。もうその時はずっと泣いていたんだよ。もう俺たちは生きていけないと思っていた。」

そのあと俺たちは姉ちゃんの墓があるイギリスへと向かった。

・・・

『あれが・・・マリの・・・いや 有理さんの墓よ・・・』

と当時のキリヤが言う。

『あの・・・お墓の前にいる人は誰ですか？』  
と綾乃は聞く。

『・・・ あの人・・・』

俺たちは事実を知った。 姉ちゃんは戦死じゃなかったって。

あのお墓の前にいるやつのために死んだ。 あいつが死ぬのを姉ち

やんは犠牲に・・・

俺たちはそいつをずっと憎んでいた。　ザックス・アンドレスを。

俺たちは墓をお参りをするだけのはずだったのに悲しい知らせを聞いただけだった。

『あいつのせいで・・・　あいつのせいで・・・』  
と俺はずっとつぶやいていた。

『ねえ、裕太　あの人・・・　ずっと墓の前で泣いていたけど・・・』  
と綾乃は聞く。

『そりゃそうだろ・・・人の墓の前で笑っていたらぶち殺すところだからな・・・』  
と俺は答えた。

そして、先週の事だった。　俺らはお前が日本へ引っ越してくることを知ったんだ。』

と裕太は全て話す。

「すまん・・・　わかってるんだ・・・俺も・・・　マリが死んだことは・・・　全て俺が悪いんだ。

俺も知っているんだよ・・・　あの時俺がもっと強ければ・・・  
俺は命を変えてでもしようとしたんだ。

そうだ・・・いい締めだな。　おい、お前。　俺をころしてくれえ。  
それでいいだろ・・・」

とザックスは言う。

綾乃と透哉は驚く。

そして裕太は

「わかったよ・・・それで俺らの恨みはなくなる・・・それでいいんだな。」

と言う。

「ああ」

とザックスは言う。

「それじゃあ殺させてもらおうか・・・」

と言うと裕太は手を伸ばしたザックスに攻撃をする。

「（そんな・・・うそでしょ・・・）」

と綾乃は思う。

・・・

・・・

「うつ・・・」



とザックスは目を開ける。

「悪いがまだ話は終わっていないんだ・・・」

と裕太は攻撃をわざとはずす。

「俺らはその1週間前にもう一つのことを聞いた。それはお前が姉ちゃんに会うために1年もかけて旅をしていたことをな。俺らは最初それを信じなかった。でもお前のことは事実だとイギリス政府は証明した。俺らは考え直したんだ。お前がどれだけ俺たちの姉ちゃんのことを思ってたのか・・・命を懸けて姉ちゃんに会ったのか・・・そんなやつを殺せるわけねえだろ？俺が。」

俺達は思ってたんだ。姉ちゃんは戦死したんだ。愛する人のためにな。だから俺たちはお前にお礼も言いたいんだ。」

と裕太は話す。

「もういいんだ。俺は。所詮ぼろぼろになった雑巾だ。」

とザックスは言う。

「ほうほう。術者さんがいっぱいいるみたいですね・・・」

とある男が話しかける。

「しまった。術者狩りだ！」  
と透哉は言う。

「日本に術者狩りだと？」

とザックスは言う

- e n d -

「術者狩りね、その通りだよ。僕は君たちの力をもらいに来ただからここで死ぬわけにはいかないのさ。」

というと術者狩りは攻撃をしてくる。

・  
・  
・  
・  
・

キーン

誰かが攻撃を止めたような音がした。

「確か・・・海藤・・・考樹だったかしら・・・早く逃げなさいよ・・・」

と同じクラスメイトの小鳥坂 美月が言う。

「なんでお前がここに？」  
とザックスが言う。

「理由は後で説明するわ・・・この周りにはたくさんの術者狩りが居るの・・・だから早く違つところに!!」

と美月は言う。

「わかった・・・」  
とザックスが言う。4人は行く。

「あの人は誰なんだ？」

と裕太は走りながら聞く。

「よくわかんねえが俺に術者だろ？とか今日聞いてきたんだよ」

とザックスは言う。

「（まだ術者がいるのかしら・・・）」  
と綾乃は思う。

「あ、術者狩りが！！」

と透哉は言う。

「（しまった・・・ ミイナが・・・）」  
とザックスは思う。

「お前ら！俺はこっちに行くから手分けでいくぞ！」

とザックスは言う。

「わかった。そっちをよろしく。」

と裕太は言う。

そしてザックスはアパートへと向かった。

・・・

・・・

「ミイナ!!」

とザックスは叫ぶ。

「どうしたのよ?いきなり?」

とミイナは言う。

「良かった。お前・・・ そうだ・・・ お前だから今の現状が分かるはずだ・・・」

とザックスは言う。

「それが・・・ こつちに来てから全然予知ができないの・・・ だから・・・」

とミイナは言う。

すると

ドーン!!

「誰だ!?!」

とザックスは言う。

「慌てることはないですよ。ザックスとミイナ。 ちょっと待っているだけで体が浮くから・・・」

と言うと術者狩りは銃で撃ってくる。

「逃げるぞ!!」

とザックスはミイナを抱いてベランダから降りる。

「ちょっと！？ザックス！？なんなの？」

とミイナは聞く。

「俺もわからねェんだ！急ぐぞ！」

とザックスは言う。

するとザックスたちは術者狩りに挟み撃ちされた。

「くっそ・・・行き止まりか・・・」

とザックスは言う。

「ザックス。私、戦えるわよ・・・」  
とミイナは言う。

「わかった。いくぞ！！」

とザックスは言う。2人は攻撃を始める。

「うおおおお」

「いけええええ」

・・・

「なんて数の術者狩りだ・・・」  
と裕太は言う。

「さすがザックスたちの情報だけでこんなに集まるなんて・・・」

と綾乃は言う。

「一人ずつやっていく時間はなさそうね・・・」  
と透哉は言う。

「うわああああ」

と綾乃が叫ぶ

「綾乃!!」  
と裕太は言う。

しかし3人はやられてぼろぼろになる。

「うち・・・なんて強いんだ・・・いつもと違うじゃないか・・・」

と透哉は言う。

「もういいだろう・・・ここで眠るんだ!」

と術者狩りは言う。

ドーン!!

「おい、テメエら。何しようとしてんだよ。そんな汚いやり方で。」

そこにはザックスとミイナがいた。

「おいお前ら。後のやつは俺とミイナで処分しておいたからよ・・・  
後はやるんだ・・・」

とザックスは言う。

「うおおおおおっおおお！！」

とザックスは叫ぶ。

そして相手の術者狩りは攻撃を止める。

「なるほど、俺の攻撃を止めるとはな・・・じゃあよ これでど  
うだ？ ダークインパクト！！」  
とザックスは攻撃していく。

・・・

そして相手の術者狩りは倒れた。

ザックスは3人を安全な場所に運びミイナは救急処置をした。

「お前ら大丈夫か・・・」

とザックスは3人に声を掛ける。

「ザックス、この人たちは？」  
とミイナは聞く。

「ああ友人だよ、こっちの。」  
とザックスは言う。

「ほんと、ザックスって友達作るのはやいねえ」  
とミイナは言う。

「おいおい、まだ友達は認証してねえぞ。それよりこの小っちゃくてかわいい女の子はお前のなんなんだよ？」  
と裕太は聞く。

「可愛いつてなによ！」  
とミイナは言う。

「ああ、こいつはあれだよ俺んところのいそろつだ。」  
とザックスは言う。

「いそろつじゃない!!」

この場所に笑顔がいつの間にかあった。

・  
・  
・

次の日・・・

「いつてきまーす!!」  
とミイナは言い出ていく。

「いつてこーい!!」  
とザックスは言う。



そしてザックスも登校した。

「おはよー海藤君！！ ニュース見たかい？ 大爆発が起きたんだってよ？」

と同級生の斉藤は言う。

「そうなんだ。この街も怖いな。」  
とザックスは言う。

教室に向かう途中 会いたくない人に会ってしまった。

「ちょっと！海藤！！ こっちに来なさいよ！！」  
と呼ぶのは小鳥坂だった。

「あれ。。。美月さん・・・なんでしょうか・・・」  
とザックスは言うと言つ張られていった。

「珍しいな 小鳥坂が男を引つ張るなんて！！」

と斉藤は思っていた。

・・・

場所は人目が見つからないところだった。

「あのお・・・なんでしょうか・・・ 小鳥坂さん。」  
とザックスは聞く。

「なんでしょうかって・・・ あんたそれはないでしょう！」

と小鳥坂の顔が近かった。

「あんた・・・やっぱり術者だったのね・・・なんで隠しておくのよ！！　なんか様子がおかしいと思って後を追ったら問題に巻き込まれてたじゃない！」

「あの小鳥坂さん・・・それって・・・ストーカー？」

バシン！！

小鳥坂の手が俺の頬に思いっきり当たる。

「なんで私があんたのストーカーなんてしないといけないのよ！？　バカでしょ？」

と小鳥坂は言う。

「それより、お前も術者なんだな・・・」

「絶対に言わないでよ！！　私も・・・あんたのこと言わないから・・・　それとあんたと一緒に同居しているあの小っちゃいのもね。」

「お前、どれだけストーカーしてるんだ・・・」

と言った瞬間もう一発喰らってしまった。

「術者ね」

と何か目線がしたような気がした。

・・・

学校帰り、門からはカップルが歩いて出て行ってた。

すると向こう側に違う制服の女の子が立っていた。

よく見ると昨日の綾乃だった。

「あ、ザックスさん!!」

と叫んでいる。

俺は綾乃のところへ向かった。

「あの、ザックスさんいきなりすみません。その昨日はありがとうございました!!」

と綾乃は言う。

「ああ問題ないよ。」

「ところで・・・聞きたいことがあるのですが・・・ザックスさんは有理ちゃんって・・・恋人だったのですか!？」

とあまりにも綾乃のストレートの質問に飲んでいたコーラを吹いてしまった。

「大丈夫ですか!？」

と綾乃は言う

「大丈夫だよ・・・恋人だったのかな・・・なんだったんだろう・・・あいつはこんなオレでも支えてくれたからな・・・」

人前じゃ強がっていて本当は弱い俺を。　ここまで強くしてくれたからな・・・

あいつが学校で勝負を挑んでなかったらこんな俺ではなかっただろう。」

「（ああ有理ちゃん、来た早々に勝負を挑んだんだ。）」

「ところでザックスさん！！　有理ちゃんのどこが好きなんですか？」

「またもやストレートだな・・・　俺は・・・　あいつがくれた本当の強さが好きなんだ。　変わってるだろ？」

「いや、そうでもないですよ。　私の有理ちゃんだったらそんなことしそうだもん・・・　あ、すみません。私こっちなんで・・・　あ、もしよかったら電話番号を・・・」

「ああ　いいよ　はい。」

「（スマートフォン・・・　最新すぎてわからない・・・）  
と綾乃は思う。」

・・・

「ただいまー」

と俺はミイナに言う。

「おかえりー」

「なあミイナ学校はどうだった？」

「うん、楽しかったよ!!」

とミイナは言う。

「そっか・・・なら大丈夫だな・・・」

「ねえザックス・・・昨日も守ってもらっちゃったね・・・」

「気にスナって。。。」

とザックスは言う。

「今度は・・・私がザックスを守るんだからね・・・」

「それはありがとな・・・でも死んでもらうのはもう勘弁だからな・・・」

- e n d -

### 第3話（33話）都内観光（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

### 第3話（33話）都内観光

#### 3話

俺たちは日本に来て3日を過ごそうとしていた。

一昨日は早速戦いに巻き込まれ大変だったがどうにかばれる事もなく今日も普通どおりに学校へ行ってた。

「海藤！！おはよー」

いつもの斉藤が話しかけてくる。

俺たちはなれない学校を2人で入り靴を履き替え教室へ入る。

イギリスでも日本の学校にいたがこんなに広くて人数が多いと本当に驚くもんだ。

ほかのみんなは高2だから友達はたくさんいる。でも俺はことしきたばかりだからまだいない。

まあそれは徐々にどうにかなるだろうと思いつつもクラスの座る。

術者狩りのことだがまだイギリスには報告していない。なぜならミイナも学校になれたことだしこれから引越すとかわいそうとも思った。でも本音はあまりみんなに迷惑をかけたくなかったんだ。

そうやって考えてるとある女が話しかけてきた。最初は小鳥坂かと思ったがよく見ると違う人だった。

確か近藤真奈だったか。

「ねえ海藤君、いきなりごめんね。」

「いやいや、大丈夫だけど。」

「海藤君ってまだ来たばかりなんですよ？」

「ああ・・・そうだけど・・・」

「もしよかったら、土曜日観光に連れて行ってあげるよ。」

「でも悪いんじゃないか？」

「大丈夫だよ。海藤君のことも知りたいし。」

「わかったよ。ありがとう」

「うん、じゃあ10時に駅前ね。」

「ああ」

と言うと近藤は自分の席へ戻った。

後ろからなんか変な視線を感じたが気のせいか・・・いや気のせいではなかった。

小鳥坂が疑わしい目で俺を見ている。目があつとあいつは目をそらした。

・・・



・・・

キンコーンカーンコーン

学校の終わりのチャイムが響く。

下駄箱に行くと昨日と同じ場所に小鳥坂が居た。しかもとてもお怒りのようだった。

だいたい起こっている理由はわかった。

「ご・・・ご機嫌いかがでしょうか？・・・」

と俺は聞く。

「あなたね・・・まあいいわ 帰ろうよ。」  
と小鳥坂は言う。

夕日がこの街を照らしている頃、俺と小鳥坂はいつもの道を下っていた。

「あなた、あの女とどういう関係なのよ？」

と小鳥坂は聞いてくる。

「え？しらねえよ。今日突然声かけられたんだからよ。」

「それもそうよね・・・あなた女運なさそうだから・・・」

と言われる。

「でもあの女は学校でもモデルって知ってた？」

と小鳥坂に聞かれる。

「知るわけないじゃねえか。だからなんだっていうんだよ。」

「まあいいわ・・・ あんたは知らない女でもどこかへ一緒に行くタイプの人なのね・・・」

と小鳥坂はいい

「私、こっちだから・・・じゃあね。」  
と言い帰っていく。

「おい!!」

と俺は言うが小鳥坂は走って行った。

家まであと3分ぐらいだった。

俺は小鳥坂に勘違いしてもらっては困ると思った。

もちろん好意なんてない。むしろ好意があってはいけないんだ。俺は自分に約束したんだから・・・あいつに・・・

・  
・  
・  
・  
・

「ただいまー」

と俺は家に入る。 ミイナに鍵を持たせておいたから家には入れていた。

「おかえりー」

と奥の寝室から声がする

寝室と言ってもミイナの部屋になっている。 俺はリビングのソファで寝ている。 もちろん部屋もない。

俺たちの家にはトイレ、風呂、リビング、ダイニング、寝室しかないからだ。

部屋はあの時に散らかされたがどうにか昨日2人で片づけた。

「ねえザックス。 今日のご飯は？」

「適当に作るわ。 材料もあまりないし。」

「じゃあさ買い物行こうよ！」

「んー。 大丈夫だ。 どうにかな。」

「ひどいよ！ザックスー！」

「また明日にしようじゃないか。」

「わかった・・・」

と不機嫌そうにミイナはいいリビングでテレビを見ている。

俺は昨日かった野菜を適当に取出し適当に炒めて料理を作った。

そして30分ぐらい料理をしていた。

「ミイナ、運んでくれ。」

と俺は言う。

「わかった」

とミイナはテレビを見ていたのを邪魔されたように言う。

「さすが、男料理だね。」

とミイナは言うが

「男料理をなめんじゃねえぞ。  
と俺は言う。」

そして俺は食べ終わった後、食器を洗いミイナを寝かせつけ宿題をし寝ようとしていた。

「近藤か・・・確か土曜日だったけな・・・」

・・・  
・・・

金曜日。

やけに小鳥坂の機嫌が悪かった。やはり気にしているのかと思ったがそっとおいた。

近藤は俺とすれちがうと笑顔でウィンクし「明日楽しみにしている」という感じな顔をしていた。

そして家に帰り飯を作り・・・いつもより早く寝付いた。

・・・

・・・

土曜日。

ミイナは裕太たちの家に預けてもらうことにした。

あいつらはすぐに理解をしてくれたからだもし何かあったときに助けることが出来るからだ。

でも、ミイナはせっかくの土曜日だっていうのに俺に会えないのを怒っていた。

そして少し早めに駅前へ着いた。

土日だから通勤ラッシュではなかったが部活などで使う人で多かった。

「ごめん、遅くなった。」

と俺は声を掛ける。

「うんうん。大丈夫だよ、私も今来たところなの。」

と言う。

「じゃあこの電車に乗って都心まで行こうか。」

と近藤はいい都心まで2人で行く。

「あの・・・近藤さん・・・」

と俺は声を掛ける。

「真菜でいいわよ。」

「それじゃ・・・真菜・・・今回なんで俺を誘ったの？」  
と俺はストレートに質問をする。

「ああ心配してたの突然で？ 私、海藤君が早くこの街に慣れてもらいたいなーって思ってたね。」

と真菜は言う。

「そっか・・・ありがとう・・・」  
と俺は言う。

「まだ終わってないよ。 おもしろい。」  
と真菜は笑いながら言う。

着いたのは東京駅だった。

「うわぁーすごい人の数・・・」  
と俺は驚く。

「この駅は数えきれないほどの電車が止まるからね。」

と真菜は言う。

俺は日本の事をよく知らない。だけど、これはばらしてはいけない  
と思い真菜には知ってるふりをして会話をしていた。

2人はそのあと浅草や秋葉原など色々周っていた。次第に二人は  
笑顔で会話をしていてとても楽しかった。

その頃、裕太の家にはミイナが居た。

ミイナは裕太のレースゲームでみんな楽しんでた。

「ミイナ。今度はぜってーまけねえぞ!!」  
と裕太は言う。

「私だって負けないんだから!」  
とミイナは言う。

「私もよ!」  
と綾乃も言う。

そしてミイナは突然嫌な予感を察知した。

「ザックス・・・ザックスが・・・」

とミイナはそんな予知夢をふと見ていた。

ミイナはトイレに行くふりをしてゲームを中断し外へ出て行った。

もちろんミイナはこの街の道の事も知らない。ただ体が呼ばれる方へ向かっていった。

2時ぐらい。

少し遅れ気味の昼ご飯を取った。あんまり食べ過ぎてもと思い家から近くのハンバーガーのチェーン店に入った。

「いや 今日楽しかったな！」  
と俺は言う。

「うん、私も。 ねえねえこの後どうする？」

まるでカップルのような会話をしていた。

あいつのことを忘れたように。

「ちよい、トイレ行ってくるわ。」  
と俺は言う。

「うん。」

俺はトイレへ行った。そして慣れていない携帯にメールが来ている



ことに気付いた。

「あれ、メールってどうするんだっけ・・・」  
と俺は考えながらメールを見る。

メールは裕太からだった。

内容は。

「デート中すまんよ。ミイナが消えたんだ。      すぐに探すのを手伝  
ってほしい。」

とのメールだった。

俺はすぐにミイナを探しに行こうとしていた。

・・・

そのころミイナは走り続けていた。

「（ザックスが危ない・・・）」

と思っていた。

するとミイナはある人にぶつかった。

ドン

「いてて・・・」

とミイナは言う。

「ちよつと・・・大丈夫？」

とその人は話しかけてきた。その人は小鳥坂だった。塾帰りで自転車に乗っていた。

「あの・・・この近くのハンバーガー店を教えて！！そうしないと・・・ザツ・・・こ・・・考樹が・・・」

小鳥坂はその名前にピンときた。

「わかったわ・・・行きましょう。」

と小鳥坂は自転車の後ろにミイナを乗せてとりあえず近くのハンバーガー店まで向かっていた。

・・・

その頃ザックスはトイレから出て席に戻ろうとしていた。

しかし、外の静けさに気付いた。あまりにも静かすぎていた。

そして一人の女の悲鳴・・・

「ま・・・真菜!？」

と俺は走ってトイレを出て上の階に行く。

「真菜!!」  
と俺は叫ぶ

「ようやく現れたな・・・ ザックス・アンドレス・・・」

と男が言う。男は真菜を人質にしている。

「てめえ・・・そいつを離せ。」

という。

「それは出来ないね。離してほしいなら・・・ お前の命を頂こうか!？」

と男は言う。

#### 第4話（34話）目標（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

## 第4話（34話）目標

### 4話

イギリス・術者狩りの集まりにて

「なるほど．．．目標の物がここにはいないとはな．．．」

「どうやら逃げたみたいらしい。要するにここを探すのは無駄ということでは？」

「そういうことになりますが．．．もう見つかったという報告です。それに目標の物と考えられないものが一緒にいるということ。私たちの奴らはもうその場所へ向かってますよ。」

「その考えられないものとは．．．」

「もうお忘れのことかもしれませんが．．．」

．．．  
．．．  
．

「何のつもりだ．．．いつてみるや．．．」  
とザックスは言う。

「決まってるだろ。君の前に現れてこんなことをするってことは．．．  
わかってるよね．．．」

と男は言う。

「てめえ・・・」

俺は思っていた。ここで攻撃をしまえば真菜にはれてしまう。  
これは春田との約束だ・・・ばれては・・・

真菜は泣きそうな顔で助けを求めている。

「うち・・・どういうこと考えてるかしらねえが!!」

俺は術を使わずに攻撃しに行った。

「僕に勝てるか？ そんなことで？」

ザックスは殴り返れる。

「（鉄!?!）」

と俺は思った。

「（こいつは術師か・・・）」

と俺は思う

「まあまあ、術者だと思って驚いているのかい？術者狩りは術者も  
いるんだよ。でも、僕はもっと強い力が欲しい。だから俺が  
お前を・・・」

とザックスに思いっきり攻撃してくる。

その時だった。

相手の攻撃がザックスの目の前で止まった。

「あんた？何してんの！ 早く行きなさいよ！」

と小鳥坂は言う。小鳥坂はカードを持っている。そこにはミイナもいた。

「お前・・・」

「説明は後でするわ。とりあえず真菜は眠らせておいた。もう思う増分にできるんじゃない？」

と小鳥坂は言う。

「なるほど。術者狩りさん・・・ これでバトルが出来るってわけかあ・・・」

とザックスは目を赤くなったように言う。

そしてザックスは闇術を使い攻撃する。

「なに！？」

ドーン

・・・

「ふう、どうにか気絶程度にはしておいたが・・・」  
とザックスは言う。

「しかし、あいつは鉄術師だが高んではかの客を眠らせることが出来たんだ？」  
とザックスは聞く。

「最近は何師の中でも催眠液などが売られたりしているみたい・・・」  
と小鳥坂は言う。

「そうか・・・ところでなんでここにいるんだ？」

とザックスは聞く。

「あんた・・・それ最初に聞くんじゃない？ この娘、私が塾帰りに会ったの。助けを求めていたから色々聞いてみるとあんたの事を聞いたから急いでここまで来たのよ。」

「そうか・・・まあありがとな・・・」  
とザックスは言う。

「別に・・・ところで聞きたいことがあるんだけど？ この娘はあなたのなんなの！？」

とストレートに小鳥坂は質問してくる。

「いや・・・その・・・なんていうかな・・・妹というか・・・」



とザックスはごまかす

「こんなに似てない妹がいるのかしら？あんたに違ってかわいらしいのに。」

・  
・  
・

ザックスは現場を後にし家へ小鳥坂と向かった。そしてイギリスの事からここにいる理由まですべてを小鳥坂に話した。

「なるほどね・・・ 要するに海藤は由紀の面倒を見てるわけね。」

「そうだ・・・ ところで・・・ お前はカードを使う術なのか？」  
とザックスは聞く。

「そうよ。カードにはいろいろ種類があるんだけど一回使えば消えるの。私の体力ともリンクされてるから使いすぎると死んでしまう訳。人を眠らせたり攻撃をキャンセルしたりできるの。だからあんなより強いのかしら？あんたは攻撃を見てると闇術師なのね。イギリスの闇術師ね」とところで由紀は？」

「私は・・・ 水術師だよ・・・」

とミイナは言う。

「水ね・・・ 由紀はまだ小さいのに・・・」

と小鳥坂が言った時ザックスは少しびくっとしていた。

そして小鳥坂はザックスの夕食を食べて夜8時ごろに帰って行った。

小鳥坂が帰った後、俺は真菜のことを少し考えていた。小鳥坂の母さんと真菜が友人だったから真菜は疲れて寝てしまったと言い家に送っていった。

絶対に明後日今日の事を思っているだろうなーと思った。

・・・

・・・

月曜日。

「おはよー海藤！！ 昨日も爆発事故だったよ。しかもこのあいだと同じ現象が起きてるらしいぜ。ほんと、困ったもんだな。」

と斉藤は言う。

「そうかいそうかい。それは大変だったな。」

と俺は適当に会話する。どうせ俺のことだと思っていた。

いつも通り下駄箱に行く。

靴を履きかえようとしたとき真菜がやってきた。

「お、おう・・・ そういえばこのあいだはごめんな・・・」

と俺は素直に話す。

「うんうん。私は大丈夫だったよ。それと・・・助けてくれてありがとね・・・何が起きたかわからないけど・・・きつとわからない方がいいんだよね・・・」

と真菜は言う。

「そうだな・・・そうしてくれたら助かるな。それとお礼ならあいつにも言うておいてくれ。」

とザックスは下駄箱で待っている小鳥坂を指さしながら言う。

「うん。わかった。」

と真菜は言う。と小鳥坂のところに言う。

小鳥坂は俺を横目でにらんでいる。

俺は少しその目が怖かったが・・・

・・・

俺はこの日先生に高1の勉強をしていないからこれから居残りをして帰ることになった。

だから小鳥坂と一緒に帰ることもなくなった。

そして1時間ぐらい先生と居残りをして学校を出たときそこには裕太が待っていた。

「よ！闇術師さんよ！」

と裕太は言う。

「おい、その呼び方やめろや。お前なんでここに来てんだ？」  
と俺は聞く。

「まあよそんなことどうでもいいんだがな。ちょっとついてこい。」

と裕太に言われ俺は近くのコンビニにいつて今俺のマイブームのフルツミックスを買いコンビニの前で裕太と話している。

「さてと、話があんだけど・・・これは極秘で入手した情報なんだが・・・聞いてほしいんだ。」

と裕太は言う。

「なんだ？」

と俺は言う。

「術者狩り達はどうかイギリスに標的が居ないということを知って標的を日本に変えたらしいんだ。その標的をみんな狙っているみたいだな。それにお前は一昨日も術者狩りに会ってるはずだろ？もうここらへんにいることは全てばれている。」

「おいおい、待てって。お前、その標的が俺だというのはか？」

と俺は言う。

「まあそれもそうらしいが、どうかやまだあるらしいんだ。そいつらが言うには・・・今までも見たことのない力だつてな・・・なんか知っているか・・・」

「そんなばかな・・・ もう一人・・・ 待てよ・・・」  
と俺は思う。

「（ミイナはそんなすごい力を見たことがない・・・ だけどボスは俺とミイナを日本に送った。それって・・・）」

「なんか知ってるか・・・」

「ミイナだ・・・ ミイナに違いない!!」  
と俺は言う。

「そうか・・・ ならば術者狩りが引くまで気を付けた方がいい。日本もそいつらを入国させないようにするらしいが日本にはもうすでにたくさんの術者狩りがいる。」

「わかった。俺も注意をするわ。」

とザックスは言うつと裕太は塾があるからと言い帰って行った。

俺はなんとなくミイナが心配で家へとダッシュで走って行った。

そして急いで部屋に入って行った。

「ミイナ!!」

「ど・・・ どうしたの・・・」

「よかった・・・」  
とザックスはほっとする。

「どうしたの急に？気持ち悪い・・・」

とミイナは言う。

「気持ち悪い言うなよ・・・　ところでお前このあいだは俺のところに来れたとは予知能力が復活したのか？」

とザックスは言う。

「それが・・・その時急に見えたの。でも後は・・・何も見えな  
いの。」

とミイナは言う。

「そうか・・・もし何か見えたら・・・言ってくれよ・・・それと・・・これからいろいろとトラブルに巻き込まれるかもしれないんだ。だけど俺はお前を守るからな。」

とザックスは言う。

「大丈夫だって！ザックスに守られなくても自分で守れるんだからね！逆にザックスを守るんだから！」

とミイナは言う。

「そうか・・・じゃあ飯作るか・・・」

とザックスは言う。

もうその頃には術者狩りが到着していたんだ。

・・・

・・・

飯を食べ終わった後、ならない携帯に一通のメールが届いた。

メールは教授の春田からだった。

内容は明日12時に駅前のテニースにミイナなしで来てほしいという事だった。

俺はその約束を忘れないようにして眠りについた。

- e n d -

## 第5話（35話）オリジンパワー（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを入れて宜しくお願いします。



## 第5話（35話）オリジンパワー

12時に約束の場所。

ミイナは家で留守番ということにしておいた。

10分少し早くその場所へ行った。俺はだいたいどんな話をされるかわかっていた。

きつとあのことだ。

「いらっしやいませー 1名様でしょうか？」

と店員に聞かれる。

「いや、もう先に友人が待っているんで・・・」  
と俺は言う

「あ、それならあちらのテーブルになります。」

と言われ案内される。

「あつ海藤君！！こっちこっち！！」

と大学教授の春田が呼ぶ

春田は大学でこの人体実験の事について調べていた。春田は昔イギリスの大学で人体実験の手伝いをしていたんだ。しかし、人体実験があまりにも危険すぎることを知って反対側に向かうと実験チーム

からは追い出され今ではこの実験をどうすれば止めれるかを研究している。

「どうも、久しぶりというところか・・・」  
と俺は言う。

「そうね・・・まあもう少し慣れたところに呼びたかったのだけど・・・」

と春田は言う。

「だいたい言いたいことはわかってる。術者狩りのことか。」  
と俺は言う。

「まあね。きつと裕太たちから聞いたのでしょいうね。」

「あいつらのこと知ってるのか？」

「まあね。実験の時は関っていないけどあの子たちには助けられたから。」

「ええそうよ。あれは5年前ぐらいの話。私はイギリスで研究をしてたけど日本へ返されたのは知ってるよね？ もうその頃は日本に術者狩りというのが居たのよ。私は研究グループでも結構トップな所にも言ったからだいたいあなた達の術の構造は知っているんだわ。それを知った術者狩りは一気に私のところへ近寄ってきたの。」

その時に命を失いそうになって・・・ だけどそれを助けてくれ

たのはあの子たち。 命の恩人だわ。」

と春田は説明する。

「自分で作った道具に助けられたわけな。」  
と俺は言う。

「ちょっとー 私は研究だけを少しだけ助けただけよ？」

「まあ分かってる。お前の判断は間違っていないっていうことはな。もちろん騙されていたってことも」

「ありがとう。理解してくれて。それより話なんだけど・・・  
術者狩りの事」

と春田は小声で話す。

「今のところ狙っているのは・・・あなた・・・じゃなくて・・・  
・由紀ちゃんの事。」  
と春田は話す。

「由紀？ああミイナの事か・・・っておい！なぜだ？」

と俺は大声でいう。

「ちょっと声がでかい！何か由紀ちゃんのことについて知っていることある？」

「・・・ あいつの術については良くわからないな・・・」

「そうなのね・・・ どうやらあの娘、すごい力を持っているらしいわ。術者狩りが狙うくらい。」

「それなら・・・ お前が情報を持っているんじゃないのか？」

「持ってたら今頃動いてるわよ。そこが謎なの。私の推測だけど・・・ あの娘はもとも術を持っていたのではないのか？」

「そんなのあり得るわけないだろ！！ お前、イギリスのデータベースも調べたのか？」

「ええ、もうやったわよ。だけど実験リストには載っていないわ。むしろあの娘の年だと・・・ もう実験はちょうど終わっているわ。」

「うそだろ・・・ そんなわけ」

「もしあり得るとしたら・・・ 由紀ちゃんは術の起源『オリジンパワ』の持ち主なのかもしれない。」

その力があれば・・・ この世界なんて破壊は簡単よ・・・」

「ここで調べることはできないのか？もし、あいつの身になにかあれば・・・ 早くそれが違うことが証明できれば・・・」  
と俺は言う。

「それも考えたけど・・・ 今はとても危険だわ。もし検査中に機械でも乗っ取られれば術だって引き出すことが出来る。そしてその人の術にでもなってしまうわ・・・」

「術者狩りは今どうなっているんだ？」

「多分必死にあなた達を探しているわ．．．一刻でも早く見つけて．．．殺し．．．」

と春田は下を向きながら言う。

「わかった。ありがとう．．．また何か分かったら連絡してくれ．．．」

「あなたも気を付けてね。本当に。」

といい俺は店を出る。

「（ミイナが『オリジンパワー』を持っているだと．．．オリジンパワーはもうこの世の中にはないと聞いていたが．．．）」

と俺は思いながら走って家へ向かった。

家まで500mというところで嫌な予感がした。

「ミイナ!？」

俺は急いで家へと向かった。

．．．

家に着いた。家からは煙が出ていた。

扉が完全に壊されていて他のアパートの住民は外へ避難していた。

俺は住民の人にすぐに聞いた。

「すみません！いったい何が。」

「俺もよくわかんないが・・・ちょうど家に着いたときドーンって音がして・・・外を見たらこの通りだよ。」

「警察とかは？」

「もうすぐ来るらしいけど・・・どうやら人質みたいでな・・・」  
俺はすぐに部屋へと向かった。

「（ミイナが・・・ミイナが・・・）」

なかは煙で見えなかった。

もつと部屋の奥に向かうと女とミイナが居た。

「おい！てめえ・・・ミイナから離れろ！」

と俺は叫ぶ。

「あらあら・・・ザックス・アンドレスね・・・待っていたわ。」

と女は言う。

「お前の狙っているものはわかっている・・・黙って離せよ・・・」

「それは出来ないわ。あなたはわからないかもしれないけどもし私

を殺せても次を待っている人はそこらへんにたくさんいるわ．．．  
だからおとなしく私に殺されるのを推薦するわ。」

「うち．．．みんなここまで来ているって訳なんだな．．．」

と俺は言つと

「逃げ道がねえのなら．．．ストレートにいくぞ!!」

といい俺は攻撃をしていく。

「ダークボール!!」

「少しだけ相手をしてあげましょうか．．．消えろお!!」

「私の剣を壊せることができるかしら．．．」

と相手の女は攻撃を剣で止める。

「何？剣術師か．．．」

俺は手から出血していた。

「ザックス!!」

とミイナは叫ぶ。

「おやおや早速私の攻撃が効いたかしら．．． 私のスปีードに  
着いてこれるかしら．．．」

と女はいいとても速いスピードで剣を振ってくる。

「何・・・見えない・・・」

とザックスはどうにか避けていく。

その時だった目の前に何かのカードが地面に落ちた。

「（なんだ？）」

と俺は思う。

「考樹！これを使って！！」

と小鳥坂は言う。

カードからは剣が出てきた。どうやら道具カードだ。

「わかった！ありがとな！」

と俺は言う。と小鳥坂はミイナのところへと走って行った。

「私の獲物に手を出すんじゃない！」

と女は言う。

「お前の相手は俺だっていつてんだろおが！！ 他の奴に手を付ける暇でもあんのか？」

と俺はいい剣で攻撃をとめる。

「（なによ・・・この剣・・・見たことないわ・・・ まさか術が剣を取り巻いているとでも・・・）」



と相手の女は言う。

「どうやら本気の様ね。私はアンナよ。名前を言ったからにはあんなを殺すわ・・・」

とアンナは言う。

・・・

その頃小鳥坂はミイナのロープをほどき1・5?ぐらい走って人目のない少し暗いところに逃げていた。

「もう大丈夫だよ・・・」

と小鳥坂は声を掛ける。

「ありがとう・・・姉ちゃん・・・あのさ・・・ごめんね。」  
とミイナは言う。

「謝る必要なんてないわよ。あいつはやってくれるわよ。」

「そうじゃないの。」

とミイナは言う。

「ザックスが追われているのは私のせいなのよ・・・私があんな力さえ持っていなければ・・・奴らの目的はほとんどが私なの・・・私が着いて来たりしたから・・・」

「そんなことないわ。その考・・・いやザックスはあなたを絶対守るわよ。あなたが悲しむ必要なんてないわ・・・」

と小鳥坂は言う。

「よおお嬢ちゃんとオリジンパワーよ……」  
と若い茶髪の男が声を掛けてくる。

「あんたは誰よ……」  
と小鳥坂は言う。

「ははは、術者狩りだよ。オリジンパワーを狙っている……」  
と男は言う。

「由紀、動かないでよ。」  
と小鳥坂は言う。とカードを出す……

「（しまった、今カードは使えないんだ……考樹が使っている……」  
・」

「どうしたんだい！？まさかカード術師さんかい？」

と男は言う。

「（でも由紀を守らなきゃ……）」  
と小鳥坂は思う。と素手で攻撃をする。

「うおおおおおお」

しかし小鳥坂の攻撃は素手で止められて弾き飛ばされる……

「もうやめて……」

とミイナは心の中で叫ぶ。

「はっ・・・ もういちどおおおお」

と小鳥坂は向かうが

「おいおい、そんな攻撃でいいのかい？俺の力にはかてねえぜ？  
おらよっ」

と男は小鳥坂を蹴り飛ばす・・・

「うつ・・・ まだまだこんなじゃないわよ・・・」

と小鳥坂はもう一度攻撃をする

「だから・・・ 今度はほんとに死ぬぞお！」

と男は言う

「（死ぬ！？）」

とミイナは思う。

「（みんな私のために・・・ 私のために・・・ もう私も・・・）」  
とミイナは思う

「水の神よ・・・ 私たちに逆らう物を全てこの世から消しあの2人  
を救い出よ。」

とミイナはいつもと違う声で言う。

「どうしたのよ・・・」  
と小鳥坂は言う。

「ぐうおおおおおおお」

とミイナは言つとミイナの手から大きな水の玉がいくつも出ていた。

「ウォーターカッター・・・水の神よ 奴を全て粉々に刻めよ」

とミイナは言つと大きな水の玉は空を飛び相手の男の頭の上から早いスピードで落ちて行った。

「なに!？」

そして男は見ぬうちに水によって粉々になっていった。

するとミイナは倒れた。

「由紀!!」

と大声で小鳥坂は言う

・・・

その時ザックスはアンナと戦っていた。

「どちらもぼろ雑巾みたいだなあ・・・」

と俺は言う。

「最後は・・・綺麗に決めましょうか・・・覚悟するがいいわ・・・」

とアンナは言う。

「っふん・・・いいだろ・・・俺はいつも命懸けだからな・・・」

というとき2人は剣を構えていた

その時向こう側から何かが降ってくるのが見えた

「なんだあれは・・・」

と思っていたとアンナはすでにこつげきをはじめていた。

「まずい・・・」

キーン

・・・

「うつ・・・　　うわあああああああ」

とアンナは声を上げていた。

何が起こったんだとその時は思っていた。

水は光のように襲ってきた。

「なんだ・・・これは・・・」  
とザックスは思う。

すると向こう側からミイナを背負った小鳥坂が走って来た。

「考樹くー!!」

と小鳥坂はやってきた。

・  
・  
・  
・

俺の家。

「全く・・・一人で暴れまわるんだから・・・」

と小鳥坂は手当てしながら言う。

「いって・・・もっと優しく扱ってくれよ。」

「うるさいわね！！ところで・・・あなたの相手も水の玉みたいので死んだの？」

「ああ・・・確かにあれはそうだ・・・」

「それなんだけど・・・どうやら・・・由紀ちゃんが出したみたいで・・・」

「由紀が！？」

「うん、確かあの男がオリジンパワーって言ってたわ・・・」

「やはり本当なのか・・・」

「何か知ってるの？」

「知ってるも何も奴らの狙いはこいつなんだ。この力を狙っている

んだ。」

と2人は話す。

辺りは陽が暮れて行った。

あれから俺は廊下で寝て小鳥坂とミイナはリビングで寝ていた。

朝目が覚める・・・

「(うう・・・なんでここで寝ているんだ・・・そうか・・・あいつが来てるんだ・・・)」

と俺は思つと向こうから走ってくる音がする。

「考樹く!!」

と俺を踏みながら走っていく。

「おえ!!お前踏むなよ!!」

「それより・・・由紀ちゃんが!!」

・・・

どうやら由紀は外へと出て行ったみたいだ。

俺たちは裕太たちにも協力をしてもらい探すことにした。

もう2時間も探していた。

さすがに心配だった。

「後探していないのは・・・あの公園か・・・」

と俺は公園へ向かった。

するとミイナはブランコに乗っていた。

「ミイナ!」

と俺は叫ぶ。

「ザックス・・・」

と小声で言う。

「よかった・・・ここに居てくれて。。。」  
と俺は言う。

どうやら色々と歩いていたらここに着いたらしい。

「さあ家に帰ろう。小鳥坂も来てるぞ。」  
と俺は言う。

「ねえザックス・・・ごめんね・・・」  
と泣きそうな顔でいう。

「どうしてだよ・・・」



「私さえ一緒に居なければ・・・ザックスはこっちでもっと楽しく生活できたんだよ・・・だけど・・・私のせいで・・・もう、私はここに居ちゃいけないんじゃないかって・・・だから私を先にイギリスへと・・・」

「それはできねえな。」  
と俺は言う。

「俺は一つ約束をしていてな。俺はお前と約束をした。お前を何からも守るとな。どんな力を持っているか知らんが・・・俺はお前を誰にも傷つけたりさせねえ。もちろん俺だけじゃないんだ。小鳥坂も裕太も綾乃たちもそうだ。だからお前は何も思う必要はない。勝手に死ぬんじゃないやねえぞてめえ。」

と俺は言うともイナは笑顔になっていた。

「うん！」

公園の外では小鳥坂達が聞いてた。

・・・

キンコンカーンコン

「海藤！おはよっす！！一昨日も事件があったとはな・・・ほんとこの街は荒れてきたなー」

と斉藤がいつも通りに話す。

「みんな思春期だからそんな事件が起きてんだよ。ちょっと我慢してやんな。」  
と俺は言う。

「いみわかんねーよ」  
と斉藤は言いながら下駄箱へに行く。

そこには小鳥坂が待っていた。

「よお・・・考樹・・・」  
と小鳥坂は小声で恥ずかしそうに言う。

「（名前で呼び合うだ！?）」  
と斉藤は思う。

「なんでしょうか小鳥坂さん。」

「人が名前で呼んでやってるのに名字で返すのはないでしょ!」

「名前覚えるのめんどくせーよ。」

「あんたいい加減にしなさいよ・・・それより・・・昨日は見つかってよかったね・・・」

「おう。ありがとな。」

「あんた、本当に由紀ちゃんを守ろうと思ってるの?」

「はあ?もちろんだよ。俺はもう何もなくなたくねえからな。」

「ふうん この変態ロリコンが！」

と小声で言う

「ロリコンじゃネエよ！」

といつも通りの会話をしていた。

- e n d -

## 第5話（35話）オリジンパワー（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございますもしよかったら、  
評価・感想・お気に入りをお気軽にお願いします。

## 第6話（36話）コントロール（前書き）

ネットの調子が悪かったため更新が遅くなりました。

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

## 第6話（36話）コントロール

36話から

俺はミイナが特殊能力を持っていることを知ってから考えていた。

後から聞いた話だがミイナは水の能力だけではなくほかの能力も持っているらしい。

すべての起源だと春田は言った。まだミイナは水の能力しか発揮をしていないらしい。

ミイナがこの間みたいに能力が体を動かせば誰も勝てなくなるそう  
だ。

これも春田から聞いた話だがこの力が見つかった理由は昔話にある。  
とても貧乏だった村は家をたくさん建てるために多額のお金を隣町  
から借りたんだ。

その村はみんなで農業や商業を頑張り借金を返すことになった。

しかし、隣町の借金取りはそのお金を素直に受け取らなかった。

そいつらはお金が足りないと村人たちを騙す。

そいつらはお金で返せねえのなら命で返してもらおうかと言い村人  
たちを殺そうとした。

その時少し厚めのコートを着た旅人が村人の前に現れた。

その男は空を一気に暗くしある力で借金取りを消してしまう。

そんな話は誰も信じなかった。しかし、その話を信じて能力を探し続けた男がいる。

そいつはなんとその能力をとある人から見つけ出した。

そしてその能力をイギリスのために能力を抜き出しコピーを作り俺たちの体に組み込まれているわけ。

「ねえザックス、もうお昼だよ。」

と考え事をしている俺に話しかけるミイナ。

「もうこんな時間か・・・何も用意していないから外で食うか」  
と俺はいい日曜の昼は外で食べることを決めた。

土曜は補修が入っているからミイナには留守番してもらってたもんでたまにはいいだろう。

しかし、術者狩りはミイナを殺してどうやって力を抜くのだろう。  
ミイナが死んだら能力も死ぬんじゃないか。そして、俺を狙っていた理由は何なんだ。俺はもちろんオリジンパワーなんてもっていない。

意味があるのか・・・

「これほしいー！」

と某ハンバーガー店で注文が回ってきた。俺はまた考え事をしてい

た。

ボスは知っていたんだ。ミイナがどんな力を持っていたとどれだけ狙われているかを・・・

「あの・・・ザックスさん？」

と後ろから声を掛けられる。

ついイギリスで呼ばれていた名前だから後ろを振り向く。

「お久しぶりです。あの・・・綾乃って言ったら・・・」  
と綾乃は言う。

「ああ・・・あん時の・・・昼飯かい？」

と俺は尋ねる。

「ええ、なんか勉強はかどらなくて・・・」

と綾乃は言う。

・・・

俺たちはいろいろと話を聞くために一緒に昼飯を食うことにした。

「学校はどうですか？」  
と聞かれる。



「ああ、あんなに大勢だったのには驚いたよ・・・」  
と俺は言う。

「ミイナは？」  
と聞く。

「うん。向こうとは全然違ったね。」  
と答える。

「なるほど」 あ、そういえば私自己紹介していなかったですね・・・  
・ 私は神谷 綾乃です。術は超音波を使います。」

「電波とは違うのか？」  
と俺は聞く。

「微妙に違うんです。電波の方が威力は強いのですが超音波はスピードが速いのです。」

「そうなんだ・・・難しいな・・・」

「超音波か・・・」  
とミイナは静かにつぶやく。

「どうしたんだ？」  
と俺は聞く。

「あ・・・なんでもないよ・・・」  
とミイナは言う。

「それじゃあ私行きますね・・・宿題があるので・・・」

と綾乃は言つと俺の頭に何かのメッセージが送られてきた。

「（夜7時にここ・・・あなただけで。）」

「よろしくです」

と綾乃は言つと店を後にした。

「ミイナ、食料買つて帰るか。」

と俺たちも店を後にする。

・・・

夜7時 さっきの店。

「よかったゝあなたに通じて。」

と綾乃は言う。

「ああ、どうにか通じたぞ。」

と俺は言う。

「話があるのですが・・・あなた達はいろんな人から狙われているのは知ってるでしょう。」

「ああそうだな。」

「狙われているのはあなた達だけではありません。私たちもです。」

と驚きな発言を聞く。

「要するに……術者狩りは術を持っている人ならだれでもいいのか？」

と俺は聞く。

「それはもう昔の考えだそうです。　どうやら術者狩りの間で何らかのゲームが開催されてるみたいでその内容が……」

と俺は耳を傾ける。

「……術者を全て殺す。」

と綾乃は小声で言う。

「そうすれば永遠の術が手に入れられるというらしいです。」  
と綾乃は言う。

「そんなばかな……　だれがそんなの作っただよお？」

「私が思うには術者狩りをまとめていてこの力を開発した人だと思います。」

と綾乃は言う。

「なんで開発した人なんだ？」

「どうやらその術者狩り達……　命と仮の術を交換しているんです。 私たちは命と術を両方持っているので術がなくなっても生きることが出来る……　しかし、その術者狩り達は片方しか持っていないので術がなくなれば死亡……　ですから死ぬ気がかかってくるでしょう……　そんなことができるのは開発者しかないのです」

はと・・・」

「そんなゲームはおかしい！　いくらなんでも・・・　その開発者を殺しに行った方が早いんじゃないネエのか？」

「わかっていればそんなことはもうしています！」

と綾乃は言う。

「とりあえず今でも狙われているということは知っててください。」

「

と綾乃は言うと

「それじゃあまたどこかで会いましょうね。」

といい店を後にする。

「周りに狙われているか・・・」

とおもいながら帰宅する。

そして次の日のあさ・・・

「海藤よー！おはようー！！　今日は修学旅行の班決めだつてよおー！！！」

と斉藤は言ってくる。

「修学旅行？旅行でもスンのか？」  
と俺は聞く。

「何をいつてんじゃない？ 旅行だよ旅行。クラスでいくんだぜ！！」

「そんなイベントがあつたのかぁ・・・」  
と俺は思う。

・・・

席に着くといつも通りの光景だった。小鳥坂が机に座ってまだ出ていない宿題をしている。

斉藤は俺の隣でなんかを喋っているがどうでもいい内容だモンで適当に聞き流している。

そして6時間目の総合の授業。

修学旅行の班決めだった。そもそも修学旅行の意味を知らなかったがどうやら北海道へ行くらしい。

「おい、斉藤。北海道って一番北のところだよな。」

「そうだぜ。 夏だからちょうどいい気候らしいぜ。」  
と斉藤は言う。

「めんどくせえな」

「まあまあ、高校生活の最後のイベントなんだからよー！！」  
と斉藤はいい俺たちは下校準備へと入った。

その日はいつもみたいに小鳥坂は待っていなかったなので一人で家に  
変えることにした。

「ただいまー」

といつも通りに家に向かって言う。

「ねえねえ、今日さ、友達の家についていい？」

とミイナは聞く。

そういえばミイナが人の家に遊びに行くなんて聞いたことがなかつた  
なと思った。

「ああいいんじゃない？」

と俺は言う。

「ヤッター！！じゃあ準備してくるね！！」

とミイナはいった。一応、人の家だから俺も家の前までは連れて行  
こうと思っている。

・  
・  
・

俺はミイナを友達の家まで連れて行き家に帰るのがめんどくせーな  
ーと思いながら散歩をしていた。

「今日の晩飯の材料でも買いに行くか」と思いながらスーパーへ  
立ち寄る。

いつも通りに材料などを買っているとどこかで見慣れた顔の人が居た。

誰だろうと思いながら見ているとその人と目があつた。

「あなたは・・・」

と声を掛けられる。

「あん時の・・・ 裕太たちの・・・」

「あんまり馴れ馴れしく話しかけるのやめてくれませんか・・・  
急いでるんで・・・」

と相手は言う。

「おいおい、どういうことだよ？ 確か透哉だっけ・・・」

「名前を呼ぶのはやめて下さい！ そして僕の名前をすぐに忘れて下さい。」

というとすぐに行ってしまった。

「なんだよ・・・ あいつ・・・」

と俺は思いながら買い物再開する。

すると魚売り場の前にいつも通りに小鳥坂が居た。

「（またあいつか・・・ いつもいるな・・・）」

と俺は思いながら

「おい、小鳥坂。」

と声を掛けると。

「うわぁ・・・ なんだ・・・ あんたね・・・」

と小鳥坂は言う。

「なんだよって失礼だな・・・」

と俺は言う。

「うるさいわね・・・ そうだあんたに聞いてもらいたい話があるんだわ・・・」

と小鳥坂は思い出すように言う。

「術者狩りについてはもう知っているわよね・・・ どうやらその術者狩り・・・ここ数日間でも勢力を付けているわ。あんたもいつ命がなくなってもおかしくないわ・・・」

と小鳥坂は言う。

「そうか・・・ 意外と早かったんだな。」

と俺は言う。

「あんた・・・冷静ね・・・」  
と小鳥坂は言う。



俺はレジに向かいながら

「俺が犠牲になるだけであとが普通になるんならそれはそれでいいんだ。ま、そんなことにはなりたくないがな・・・ また明日な。」

と言いながら俺は店を出る。

「バカはあんなことしか考えれないのかしら・・・」  
と小鳥坂は思う。

・・・

そのころ透哉は店の帰り道を歩いていた。

すると偶然、透哉は少し大きい公園を通りかかった。

透哉は何か公園から嫌な予感がすると感じて公園の奥へと入っていた。

そして透哉は公園で倒れている人を見つけた。

「（これは・・・）」

透哉は奥へ入っていく。

すると突然悲鳴が聞こえた。

「キヤー」

透哉は急いでいく。

「（どうなっているんだ・・・）」

そして一番奥へと行った。

そこにはミイナとそのミイナの友達が倒れていた。

透哉は急いで隠れた。

「（あれは・・・あいつの・・・）」

と透哉は思う。

「お願いだから・・・私の友達まで被害を出さないで・・・」

とミイナは言っている。

「ならば・・・交換条件っていうのはどうだ・・・お前の命は残してやる・・・その”術”をいただこうじゃねえか・・・」

と男はミイナに言う。

「（”術”！？　もしかして・・・術者狩りの仕業か・・・）」

と透哉は思う。

「さてと・・・どうだい？お嬢ちゃん。　お嬢ちゃんよ言うより・・・  
・オリジンパワーよ・・・」

と術者狩りの男は言う。

「・・・」

ミイナは黙り込んでいた。

すると

「わかつ・・・」

とミイナは言いかけた時、透哉は決意を決めた。

「おい！お前・・・ そいつを離さないか・・・」

と透哉は言う。

「おやおや、オリジンパワーを守る人かい・・・ ふゝん ザックス・アンドレスじゃなさそおだな・・・」  
と術者狩りの男は言う。

「（ザックス・アンドレス・・・ やはりあいつも狙われているのか・・・）」

と透哉は思う。

「理由はわかっている。でもそいつを離せ。簡単には渡さない。」  
と透哉は言う。

「そうかい・・・ ならば俺に勝てるかな？？」

と術者狩りの男はとても速いスピードで透哉を殴る。

「ぐはっ……」

と透哉は倒れこむ。

「おやおや、術者じゃないんかい？ 術者じゃネエ奴は俺に勝てるのか……」

「（っち……うまく術をコントロールできない……）」

と透哉思う。

「いけえー ストーンハンド!!」

と透哉は行くがうまく術が成功しない……

「おいおい…… その力で術を使ったとしてもいうのか？ 全然いたくねえぞ。」

と術者狩りの男は言う

「もう一度言うが…… 術者じゃねえやつは俺に勝てねェんだよ！」

と術者狩りの男は吹き飛ばす。

「ぐはぁっつっ」

さっきよりも強いパワーで口から血を吐く。

「さてと・・・終わりにしようか・・・」  
と術者狩りの男は透哉のところへ行く。

「俺のスピードと力でお前の首を絞める・・・これで終わりだ・・・」

と透哉は首を絞められる・・・

「（もう終わりだ・・・）」

それを見ていたミイナは

「（私のために・・・私のためにしてくれてるんだわ・・・私も動かなきゃ・・・）」

とミイナが動こうとしたとき。

「ぐはっ・・・」

と術者狩りの男は透哉の首を離れた。

「なんもしてねエ奴を勝手に殺すんじゃないぞ。 てめえ脳みそあるのか？」

とそこに居たのはさっきの・・・

第7話（37話） 透哉 ストーンマジシャン（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを書いてください。

第7話（37話） 透哉 ストーンマジシャン

37話。

〃

まだ有理姉ちゃんが生きていたときだった。僕はあまり術をコントロールできなくてずっと困っていた。

裕太たちの仲間にはいるもののコントロールができなかったから術者狩りが来ても助けられてばかりだった。そんな僕をいつも励ましてくれたのは・・・

「また練習しているの？」  
と話しかけてくる有理

「あ・・・うん・・・ 少しでもコントロールしたいからね・・・」  
と僕は答える。

「ふうん でも、私は今の透哉でいいと思うけどな・・・」  
と有理は言う。

「でも・・・そんなんじゃないみんなの迷惑になるよ・・・」  
と僕は言う。

「そうかなあ？ 私は一生懸命練習をしている透哉が好きだけどなー」  
と有理は言う。

僕は少し照れていた。

そんな有理姉ちゃんが僕は好きだった。

でも僕たちとの別れと本当の別れがあつてから僕は何も考えれなかった。

「（姉ちゃんが・・・姉ちゃんが・・・）」  
と僕は言う。

「透哉・・・もう立ち直ろうよ・・・姉ちゃんのためにも・・・」  
と当時の綾乃は声を掛ける。

しかし、僕はそんなんじゃ立ち直れなかった。

そんな姉ちゃんを殺した奴が・・・姉ちゃんを殺した奴が・・・

僕は許さない・・・

（（

「なんもしてねエ奴を勝手に殺すんじゃねえぞ。 てめえ脳みそあ  
んのか？」  
ザックス  
と俺は言う。

「よお、現れたかザックス・アンドレスよ・・・ 待つてたぞお。」  
と術者狩りの男は言う。

「そろそろ、そいつらを離してもらおうか・・・お前の命のために  
もちょうどいいぞ・・・」

と俺は言う。

「ほう・・・俺も永遠の力が欲しいんだよ・・・ そんな夢をここ



できらめるわけにはいかないんだよな・・・」  
と術者狩りの男は言う。

「ならば・・・強引でも返してもらおうか!!」

と俺が攻撃をしようとしたとき

「やめてくれ!!」

と透哉は叫ぶ。

「どうしたんだ!？」

と俺は声を掛ける。

「小さい女の子くらい・・・僕だって守れます・・・僕だって  
できるんだよ!!! だから・・・引つ込んでもらえますか・・・  
これは僕たちの戦いなんです!!」

と透哉は言う。

俺は攻撃を止めた。

すると透哉は攻撃をしにいった

「うおおおおおお!!」

しかし透哉の手からは術が出ない。

その間に俺はミイナのところへと向かった。

「大丈夫か!？」

と俺はミイナに言う。

「うん・・・大丈夫・・・」

とミイナは言う。

「ミイナ、聞いてくれ・・・このことは・・・お前が全て悪いと  
思ってほしくないんだ・・・だから・・・何も考えるな・・・俺  
が守るからな・・・」

と言いながら俺はミイナを安全な所へ連れて行く。

「う・・・うん。」

とミイナはうなづく。

「はあはあ・・・もう一度・・・ストーンハンド!!」

と攻撃をするがはずれる。1回しか攻撃が出来ていない。

「ぐはあ・・・」

と透哉は倒れる。

「まだまだ・・・」

と透哉が思った時遠くから声が聞こえた。

「おい、てめえ・・・聞きたくないなら聞かなくていい・・・た  
だ俺からのヒントだ・・・」  
と俺は話す。

「なんですか！！急に。」  
と透哉は言う。

「お前が出来ない理由・・・それは術に一つの事を集中していねえからだ。お前は何かのトラウマを抱えているかもしれないが・・・今はそんなことを忘れて術だけに集中しろ・・・お前に足りないのはそれだ。」

と俺は言う。

「（そんなの・・・わかってるよ・・・僕だって術を発動するのが怖いんだよ。死ぬかもしれないし・・・また外れるかもしれない・・・それになんでここに姉ちゃんを殺した奴がいるの・・・おかしいでしょ・・・僕は殺したい。そいつを姉ちゃんの敵だと思って・・・僕は・・・僕は・・・）」

「お前を殺すんだよおおおおお！！！」

と透哉は術者狩りの男に攻撃をしてみた。それは術が発動されていた。

「やったぞ！！！」  
と俺は言う。

すると術者狩りの男は倒れて行った。

そして透哉も倒れてしまった。

「おい！！大丈夫か！！透哉！！！」  
と俺は叫ぶ

・  
・  
・  
・

透哉とミイナとその友達は病院に搬送され手当てをしていた。

術者狩りの男はイギリスからの入国を禁止されていたのに偽造パスポートなどを使ってうまく入ってきたそうだ。しかし、警察に保護されイギリスへ返されたらしい。

事件現場は何事もなかったようになっていた。

俺は病院の待合室で裕太たちと待ち合わせをしていた。

「ザックス！！ 透哉は・・・」

と裕太は声を掛ける。

「ああ大丈夫だ・・・少し疲れているみたい・・・」  
と俺は言う。

「そっかぁ・・・ 今回も世話になったみたいだな・・・」  
と裕太は言う。

「お互い様だ・・・ それより早く行ってやれ・・・」  
と俺は言う。

・  
・  
・

・  
・  
・

「（ここは・・・）」

と透哉は目を覚める。

「（確か俺は戦っていたんだ、最後はあのザックスに言われたとおりにやって確か術者狩りを倒したんだった・・・それから記憶がないが・・・）」

と透哉は考えていた。

するとドアが開く音がした。

「透哉!!」

と裕太たちが入ってくる。

「透哉！大丈夫か・・・」

とみんなが言う。

「うん・・・大丈夫だよ・・・」

と透哉は言う。

「お前・・・術が成功したらしいな。しかも今まででもすごいのを・・・」

と裕太は言う。

「うん・・・そうみたいだね・・・」

と透哉は言う。

「ねえ、裕太・・・あのザックスっていう人も・・・悪い人じゃないみたいだね・・・」

と透哉は言う。

「そうだな・・・姉ちゃんの気持ちがなんとなくわかるな・・・」

と裕太は言った

・・・

「（ここは・・・病院か・・・）」

とミイナは目を覚ます。

もうその時は夜だった。

椅子の上でザックスが座りながら寝ていた。

「ザックス・・・ザックス・・・」

とミイナは声を掛ける。

「ん・・・あ・・・ミイナか・・・目が覚めたのか・・・  
ていうか・・・もう・・・おれ幸せなんですけど・・・これで・・・  
・・帰りたいんですけど・・・あと30分・・・時間が・・・」

と寝ぼけているザックスにミイナはびんたをする。

バチン

「いってええええ　なにすんだよ・・・」

と俺は言う。

「変な夢を見ていたみたいだからね・・・」

とミイナは言う。

「夢・・・あっ・・・誤解だよ！！誤解！！気にスンナって！！」

と俺は言う。

「まあ・・・無事でよかったよ・・・」

と俺は言う。

「それよりザックスの頭を治療した方がいいかもしれないね。」

とミイナは言う。

「ご勘弁を・・・」

そう、俺はこの日に春田と話したんだ。

「海藤君、いろいろと大変だったみたいだね。」

「ああ・・・いろいろと・・・ところで話とは？」

「そうね・・・こつちも現場を調べてみたんだけどありえないことがおきていることについて話したいんだ。」

「なんですか・・・」

「今回の事件で術者狩りの犯人の怪我から焦げているのが見つかったの・・・」

「焦げ・・・？」

「そう、あなたは闇。焦がすことはない。透哉君は石。焦がすことはない。すると・・・焦がせるのと言えは・・・」

「待ってください・・・まさかミイナとか・・・」

「その可能性が十分にあるんだわ・・・由紀ちゃんが直接被害にあっているのに倒れているのはおかしい。それにその電気が由紀ちゃんの方向から出ていることもわかったわ・・・」

と春田は言う。

「それじゃあ・・・ミイナは本当にオリジンパワーを持っているとでも・・・」

「それはほぼ確定だわ・・・これ以上由紀ちゃんにいろんな種類の術を使わせると・・・あなたでもかなわないほどのテイクオーバーをするわね・・・」

「そんな・・・」

「それに使いすぎると・・・死も確定だわ・・・」

と春田から言われた。

「死！？なぜだ・・・オリジンパワーなら・・・」



「そんなのは関係ないわ・・・」

と春田は言う。

・・・

次の日、ミイナは退院できることになり俺たちは帰ることにした。

「あの・・・ザックス・・・」

とミイナは声を掛ける。

「なんだ？」

と俺は言う。

「私・・・その・・・」

「いいんだ・・・何も思い出さなくても・・・お前が何も思い出す必要はないんだ・・・言っただろ？何があっても俺はお前を守るし助けるからな・・・」

と俺は言う。

すると前から透哉が歩いてきた。

「あの・・・ザックスさん・・・」

と透哉は話しかけてくる

「どうした？」

「その・・・ このあいだはありがとうございます。そしてごめんなさい・・・ 僕は勘違いしていました。姉ちゃんの死があなたのせいだけだっということを・・・ 僕もあなたからいろいろと教わりましたよ・・・ これでまた術が使えるような気がして・・・ 僕は大事なことをずっと忘れていました・・・ 思っているだけじゃなくて先に進むこともしないといけないっということを・・・ まだ僕は姉ちゃんの死を受け入れていませんが僕がずっと姉ちゃんのことを思っているより先に進んだ方が姉ちゃんは喜ぶんじゃないかなって・・・」

「その考え方、あいつにそっくりだな・・・」  
と俺は言う。

「ま、お前もいろいろと悩みがあったみたいらしいな。でも、俺のことを恨み続けるのは間違っていない。俺が守れなかったのは事実だ。でもその事を思っているより先に進んでいった方があいつは喜ぶかもしれないな。お互いさまってことだあ。」

と俺はいいながら病院を後にする。

もうすぐ修学旅行の日だった。

- e n d -

## 第8話（38話） 修学旅行（前書き）

すみません。前回投稿する話を間違えていました。

前回をもう一度見ておいてください。

誠に申し訳ございません。

もし前回を見た場合は今回のをパスして下さい。orz

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを入れて宜しくお願いします。

第8話（38話） 修学旅行

6月 日

今日は修学旅行で北海道へ行く。

前日に荷物などを用意していて事情をミイナに話しミイナは綾乃たちがあずかることになった。

もし何かがあつたら時のために。

朝7時に成田空港の国際線ターミナルの受付口13番の前に集合だった。

成田空港まで少し遠いから空港と繋がっている特急を使うことにした。

そして朝7時。

「はい、みなさん集まったね。」  
と学年主任の鬼頭が言う。

どうやら全員そろっているようだ。

「おはつよー海藤!!」  
といったものに斉藤が話しかけてくる。

「お前・・・いつもそんな格好してんのか・・・」  
と普段見れない私服を見て聞く。

「今日は少しかっこつけてるんだよ。海藤は・・・普通の格好だな。」

と斉藤は言う。

「当たり前だろう。なんで修学旅行で格好つけねえといけねえんだよ。」

と俺は言う。

「お前は・・・わかってねーな。ほれ、近藤見てみろよ。あの格好すげえだろ？」

と真菜を指でさしながら斉藤は言う。

「なあ？めちゃくちやあの服ええやんか？人ってよ ファッションで変わるんだぞ・・・」

と斉藤は説明する。

「へいへい、わかった分かった。ところでグループは俺と斉藤と近藤じゃなかったか？」

と俺は言う

「札幌市内分散はそうだけ。寝るときは違っぞ」

と斉藤は言う。

「そこまで俺は聞いてねえぞ。」

と俺は言う。

そんな会話をしていたら先生が航空券を渡してくれた。

「12Dか・・・ お前はどつだ？」  
と俺は聞く

「俺は13番のAだぜ。」  
と斉藤は言う。

そしてみんな飛行機に搭乗した。

「13番のDと・・・」

と探しているその時だった。

なんとなく後ろから目線を感じた。

すぐに後ろを向いたが俺を見ているような人はいなかった。

・・・

1時間半後俺たちは新千歳空港に着いた。

「北海道だー！！」  
と斉藤は着いた瞬間に叫ぶ。

降りた後に今日初めて小鳥坂を見た。

「お前いつもと私服が違うじゃんか。」  
と俺は聞く

「あんたね・・・修学旅行に私服なんて着るわけないでしょ？常識ないわね。」

と小鳥坂は言う。

「じゃあ・・・少し気にしてるって訳か・・・」  
と俺は言う

「違いますー！！ そんなわけないでしょ！！」

と小鳥坂は言いながら先に行った。

- イギリス -

2週間前、ある大学にて

「ところでドクターアンドレス。 本当にこんなことをしているのかね？」

と一人が言う。

「何を言ってるんですか。これがあなたの実験に使われる命ですよ。

そこら辺のアホな奴はオリジンパワーに夢中になって簡単に命を渡すぐらいなアホなんですから、僕はその命より欲しいのは新しいパワーを作ることですからね。」

と言う。

「ならば、お前の力にもなれるようにこの実験を頑張ろうか。それよりお前はこれから日本へ行くみたいだな。」

と言う。

「そうですね。僕の予想だとこれからお偉いさんたちが面白いシヨ―でも見してくれるそうですから僕もそれを現地で見たいのですね。」

と言う。

「相変わらず変な奴だなお前は。好きにしろ。こっちが出来たら連絡をする」

と言ひ話は終わった。

・  
・  
・  
・  
・

「なあ海藤。やはり北海道って言ったら蟹やんか。蟹食べにいかうや」

と斉藤は言う。

「ちよつと！斉藤！昼からそんな高いものを食べるの！？ありえないでしょ。蟹はよるでしょ！」

と近藤 真菜は言う。

そう、今 俺たちは札幌市内分散を行っているところ。班は俺と近藤と斉藤。2人は昼飯で喧嘩をしている。

「ならさ・・・昼は簡単にあそこで済ませようぜ・・・」  
と2人に某ハンバーガーショップを指して言う。

2人はその店を見てお互い了承を取ると店の中に入る。

「やっぱり迷った時はここよね」  
と近藤は言う。

「なんかいつも食べてる味やけどまあこういう時には便利やな」  
と斉藤は言う。



「さてと、この時間のまま行くと次の目的地まではもう少しだな・  
・」

と俺が言ったその時だった。

「（目線を感じる・・・誰かにつけられているのか・・・）」  
と思う。

「どうしたの！？考樹！？」  
と真菜は言う。

「いや、なんでもない・・・」  
と俺は言う。

「お・・・お前ら・・・名前呼び合う関係やったんか・・・」  
と斉藤は言う。

「ち・・・違うつて！！そついう意味じゃ！！」  
と真菜は言った時

「ここを早く出よう。」  
と俺は言う。

・  
・  
・

何なんだこの目線は・・・ 朝空港に着いた時から感じる・・・  
ましては尾行されている感じだ。

俺たちは無事に観光を終えホテルに戻った。偶然1階の受付前に小

鳥坂が居た。

俺のことを知っているのはこいつと真菜だけ。とりあえず状況を話した。

「北海道に来てまで！？ あんた・・・気のせいじゃない？ ここまでさすがに来れるとは思わないんだけど・・・」  
と小鳥坂は言う。

それもそのはずだ。俺たちは朝早く東京を出ている。それに術者狩りはそこまでお金を払い北海道まで来るのか・・・

と考えていた。

「とりあえず・・・私も気を付けてみるわ・・・」  
と小鳥坂は言う。

「明日は北海道のバスツアーに参加します。朝7時半に下で朝ごはん。8時半には出発だから」  
と学年主任は言う。

皆、各部屋に戻り22:00には消灯だった。同じ部屋には斉藤も居る。

いきなり斉藤がトランプをしようと言い全員で夜遅くまでトランプをしていた。

・・・

朝7時に起床し7時半に朝食をとり8時半にはバスに乗るといっ予

定通りの動きで動いた。

このバスツアーが最悪になることも知らずに。

俺たちは普通通りにバスに乗車する。

バスに乗って都市高速に乗りバスの中はバスレクとかで大盛り上がりだった。

高速道路を走り出して20分後ぐらいだった。

3・・

2・・

1・・

とカウントするようにバスは距離を縮めていた。

すると急にバスが大きな音を立てて爆発をしバスは横転してしまった。

「うわあああ・・・」

とバスの中の生徒は言う。

「何が起きたんだ!!」

とバスの中はパニック状態だった。

運転手が

「左側と後ろの非常口を開けて!!」  
と叫ぶ。

バスの中は煙ですごかった。

「先生！！ 後ろに車が衝突していて非常口が開けません！！」  
とある人が言う。

俺もあまりにももの衝撃で少し目が開けなかった。

目を開けると生徒の中には頭から血を流していたりしている生徒もいた。

この時みんなは事故だと思っていた。

「先生！こっちの非常口は開けれました！」  
と生徒が言う。

運転手が

「バスの窓側にある赤いハンマーで窓ガラスを突き破ってください  
！」  
と言う。

俺はちょうど一番窓側に近かったから仕方なく生徒を踏みながら窓  
ガラスを割った。

そして俺は先に外に出て生徒の手を引っ張りながら引きつりあげた。

・・・

「事故にしては煙がすごい・・・」

と俺は思っていた。

全員出てきたときには救急車とパトカーがやってきた。

俺はとりあえずバスから離れようと思い１メートルぐらい来た道を戻っていった。

すると道路に四角い何かが焦げて落ちていた。

「（爆弾！？）」

と俺が思った時後ろから小鳥坂が走って俺を突進した！！

「危ない！！」

とその時その四角いものは爆発をした。

ドーン

いったいなんなんだ。

爆弾は爆発したがこの爆発による被害は何も出なかった

「大丈夫！？」

と小鳥坂は聞く。

「ああ大丈夫。ありがとう。しかし、なんでこんなことが・・・」  
と俺は聞く。

術者狩りよ・・・と知っている小鳥坂だが責任を負わせないために  
言わないことにした。

「なんかの事故わよ・・・」  
と小鳥坂は言う。

「そうか・・・しかし何の目的・・・」  
と俺が言った時

「あ、先生が向こうで呼んでいるわ!!」  
と小鳥坂が急いでいい2人は戻る。

・・・

俺たちは警察のバスを使用し治療が必要な生徒は病院へ、必要のない生徒は署の講堂へと運ばれた。

警察は事件の調査に忙しそうだった。

真菜と斉藤は治療が必要と判断され病院へ運ばれたが俺と小鳥坂は必要がないと判断された。小鳥坂は誰かと携帯で話していた。

その時俺の携帯に電話がかかった。相手は綾乃からだった。

「もしもし」  
と電話に出る。

「あ、ザックスさん!! ニュース見ました!! 怪我の方は!!」  
と急ぎながら綾乃は言う。

「ああどうにか大丈夫だった・・・ まあけが人は酷いがな・・・」  
とまるで他人事のように言う。

「そうですか・・・ならば私の話を真剣に聞いてもらえますか。それとその話を聞いて自分が全て悪いと思わないですか？」  
と綾乃は言う。

「どういう意味だ!？」  
と俺は聞く。

「とにかく私の話を聞いて自分で全ての責任を取らないことを約束してくださいませんか!？」  
と綾乃は言う。

「ああ・・・わかった。だからなんだ。」  
と俺は聞く。

「これは事故ではないです。事件です。それもテロでもなく偶然でもなく・・・術者狩りの仕業です。」  
と綾乃は言う。

「!？」

「おそらく、術者狩りはあなたを追跡しそこにオリジンパワーが居ると思っていたんでしょう。バスを爆破させるまでなかったのに・・・とにかくそういう訳です。」

「それは・・・本当か？」  
とザックスは聞く。

「まだ詳しいことは分かりませんが・・・まだ何が起きるかわからないので注意して下さい。」

と綾乃は言つと電話を切つた。

自分で全ての責任を取ろうとしないでください。

この言葉が頭に響いた。

- e n d -

『事件は昨日の朝、札幌市内の都市高速道路で修学旅行をしている生徒が乗っているバスを狙った爆発テロが発生しました。生徒92人中34人が乗っている1台のバスが爆発し23人が負傷しています。また北海道警察は犯人の行方を探しています。警察によりますと爆弾は道路に設置されていて何者かが遠隔で操作をされたものと．．．』

今日はこのニュースがずっと流れていた。

東京にいる他のみんなは心配していた。

俺のせい．．．か．．．

と思っていたがやはり綾乃の言つてたことを思い出してしまふ。

全てあなたが責任を負う必要がない．．．か．．．

1晩が空けとりあえず俺たちは東京へ帰ることが決まったしかしもしこれがテロの可能性とすれば飛行機は危ない。ということで急に新幹線で帰ることになった。

けがをしている生徒は北海道に残ることになった。俺たちは警察署



の講堂の中で待っている。講堂は結構広く警察は寝袋や食料まで出してくれた。

すると小鳥坂が俺のところへやってきた。

「ねえ、警察の人が・・・」  
と小鳥坂は言う。

どうやら俺たちと話をしたいそうだ。

俺と小鳥坂は警察に誘導されながらドラマとかで見る取調室・・・ではなく学校の応接室みたいなところに呼び出された。

「ああ海藤君に小鳥坂さん。忙しいところにごめんね。」  
と話すのは今回の事件を担当する警察官だった。

「話は全て春田教授から聞いているよ。ああ自己紹介を。私は今回の事件の捜査を担当する増田です。」  
と増田は言う。

「春田から聞いてるってどういうことですか？」  
と俺は聞く。

「ああ春田教授は私の姉。結婚してから春田になったのさ。まあそんなことはどうでもいいけど。今回は事件と見るより・・・テロと言った方がいいかな。」  
と増田は言う。

「まあ海藤君はオリジンパワーと言われる起源の力を持っている子と一緒に住んでいるんだよね。それで術者狩りという集団はその才

リジンパワーを狙っている。それで、今回のテロは早くオリジンパワーを奪おうと何者かが仕掛けたものさ。ああ、そうだ、海藤君に一つ言っておかなければならない」

と増田は言う。

「君が全て責任を取る必要はないんだ。何も君が悪いわけじゃない。」

と増田は言う。

「わかってます。でも・・・このままじゃ被害が・・・」  
と俺は言う。

「そのために君たちには僕たちの作戦に従ってほしいんだよ。これも姉と一緒に作ったんだが。まず、他の生徒は新幹線で帰ることにしたよね。もし、そこに君たちが居たらまたテロが起きる可能性がある。だから君たちには少しだけここに残ってもらいたい。ただそれだけさ」

あまりにも簡単な作戦で少し驚いたがまあそれぐらいならと思っていた。

「わかりました。そうします」  
と俺と小鳥坂は言う。

「そう、とりあえず2人だけだから1室部屋が空いているもんでしばらくそこを使っておいてくれ。」

「はい・・・分かりました・・・ あれっ・・・ 部屋・・・  
2人・・・ 1室・・・」

と言う

「っておい！！　なんで2人なのに1室！？　おかしいでしょ！？

」

と俺は言う。

「そ．．．そうよ！！なんで私が！！　え、？　こいつと一緒に！  
？」

と小鳥坂も言う。

「まあまあ．．．2人とも落ち着いてくれ．．．　1室しか空いて  
いないんだ．．．」  
と増田は言う。

．．．  
．．．

2人は部屋に案内され部屋に入る。

「あんた．．．風呂場で寝なさいよ．．．」  
と先に小鳥坂に言われる。

「はいはい．．．分かりました。」  
と俺は言う。

ここは警察署とは思えないほどホテルみたいな感じの部屋になっていた。

とりあえず俺は外の情報が欲しいなと思いテレビをつける。

ニュースはこの事件について言っていた

ずっとニュースで言ってるなーと思っていると突然外からパトカーのサイレンが鳴り沢山のパトカーが外へ出て行くのが見えた。

そしてニュースも突然切り替わり

『速報です。昨日のバス爆破事件で生徒が運ばれた病院に生徒を人質にした立てこもり事件が発生しました。病院の関係者によりますと犯人は不思議な力を持っていることから術者ということが分かりました。警察は現在・・・』

というニュースだった。

「おい・・・どういうことだ・・・」  
と俺は言う

「立てこもり？なんで病院に・・・」  
と小鳥坂は言う。

すると部屋の内線電話が鳴った。

「もしもし・・・」  
と俺は出る。

「ああ海藤君。今ニュースは見てるかね？」  
と増田の声がする。

「はい、見ました。いったいどういうことが・・・」  
と俺は言う。

「まだこっちにも事情が分からないんだ。とりあえず言いたいことは君たちはこの部屋・警察署から出ないでくれ。」  
と言われ増田は電話を切る。

「何の真似だ・・・」  
と俺は思う。

ニュースはずっと速報を言っている。

「ねえ・・・考樹・・・」  
と小鳥坂は言う。

「なんだ・・・」  
と俺は言う。

「あんだ・・・この事件全部あんだが悪いと思っている？」  
と小鳥坂は聞く。

「そうだな・・・そう思っている」  
と俺は言う。

「そうよね・・・そう思ってるよね・・・じゃあ私達このまま待機していいのかしら」  
と小鳥坂はいい。

「そうだな・・・ダメだな・・・」  
と俺は言う。

「ならば・・・私にいい方法があるの・・・」  
と小鳥坂は言う。

・  
・  
・

東京。

「しかし、大変なことになったな。」  
と裕太はみんなに言う。

「本当にそうだね。でも北海道まで術者狩りが行くなんて。」  
と透哉は言う。

「もちろん狙っているのはザックスではなくミイナちゃんなんだよね」

と綾乃は言う。

「とりあえず、俺たちが出来ることはミイナを守ることだ。ザックスのためにもな」  
と裕太は言う。

・  
・  
・

一方ロンドンでは・・・

全員、術者による講堂に集まっていた。

「ねえどうしたんですか？」  
とルメリは聞く。

「どうやらボスが急に話したいことがあるって・・・」

とキリヤは言う。

「そうなんですか・・・」  
とルメリは言う。

すると舞台にボスがやってきた。

「みんな、集まってくれてありがとう。少し話したいことがあるんだ。最近のロンドンはずか平和になってきたんだ。あの時のように俺たち術者を術者狩りが襲ってくることも無くなり普通に平和に過ごしている。それはなぜだかわかるか・・・」  
とボスは一気にいう。

「奴らは目的を変えたんだ。発見されたオリジンパワーへと。それに奴らはオリジンパワーがここにはないということを知り日本にあることが分かった。そのオリジンパワーとは・・・ミイナ・アイルの事。ここに知らない人はいないだろう。お前らも知っている通りオリジンパワーを使用すればこの世界だって破壊が出来る。それを術者狩りどもは考えている。奴らはこのイギリスを世界の頂点まで持っていきたいと・・・まあこの話は中にも知っている人はいらるだろう。だが、俺はそれだけが言いたいん訳ではないんだ。」  
とボスは言う。

「イギリスは早くそれを求めたため俺らの第2の故郷・・・日本に戦争を起こす。」

とボスが言った途端、皆がシーンとなった。

「おい・・・ボス・・・それはどうということだよ・・・」  
と一人が言う。

「俺たちは・・・またイギリスの武器にされるんだ・・・」  
とボスは言う。

「もう、戦争は起きないんじゃないの!？」  
とキリヤは言う。

「イギリスは本気でオリジンパワーを必要としている。そんなことであれば戦争なんて起こすだろう。だが日本相手じゃ俺たちも出来ないがそうすれば命もないだろう・・・」

とボスは言う。

「そんなの無理よ!! 要するに・・・オリジンパワーをイギリスに渡すわけでしょ!？世界を破壊することもできるでしょ!？それに持っているのはミイナちゃん・・・」  
とキリヤは言う。

「もちろん、その通りだ。それにお前たちがオリジンパワーを持つて帰ろうとしても無駄だ。」

とボスは言う。と皆は意味が分からないような顔をしている。

「ミイナの隣にはザックス・アンドレスがいるからな・・・」  
とボスが言う。とみんなは驚きを隠せなかった。

「ザックスがミイナを守っている。そのために俺は2人を日本に送ったんだが・・・間違いだった。こんな戦争になるとは思わなかった。」

とボスが言う。



「おいおい！！ザックスにかなう訳ないじゃないか！俺らの力じや無理だよ・・・」

と一人が言う。

「だが従うというのはオリジンパワーをイギリスまで持っていくこと・・・それが出来なければ命は・・・」  
とボスは言う。

皆は考え込んでいた。

・・・

「おい、こんなんで大丈夫なのか？」  
と俺は聞く。

「うん、まだ大丈夫みたい。」

と俺たちは部屋から出て下のフロアで隠れている。

「あ、来た！」

と小鳥坂は言う。と俺たちは講堂から出てきた同じ学年の中に隠れた。

小鳥坂は連絡をしていた友達にお礼を言っている。

どうやらこの中に隠れて逃げ出すという作戦らしい。

俺たちはどうにか外へ出ることが出来た。

すると小鳥坂はこっち！！と言って病院の方へと走っていった。

・・・

一方病院では。

「増田係長！ 犯人からの電話です。」  
と部下は言う。

増田は早くも現場にいた。

増田は車の中に戻り電話に出る。

「もしもし」  
と増田は言う。

電話の奥からは小さい声で英語が聞こえた。

そして

「あ・・・あの・・・僕は病院の外科担当の石田です・・・その・・・英語を翻訳するためにこいつを使っている・・・と言っています。」

と石田は言う。

「わかった・・・」  
と増田は言う。

「あ・・・あの・・・犯人が言ったこと以外を話すと首を斬る、それと・・・そっちからの質問はなしだ・・・と言っています。」  
と石田は言う。

「それでいい」  
と増田は言う。

「とりあえず・・・犯人が言っているのはここにオリジンパワーをよこせ・・・そして明日までによこさない・・・こいつの命と・・・生徒の命は燃やす・・・と言ってます・・・」  
と石田が言っていると電話は切れた。

「（オリジンパワーをどうやって・・・）」  
と増田は思った。

「こちら増田だ。犯人は英国人。中の人質は外科の医者、石田と生徒15人だ!!」  
と増田は言う。

そして増田は電話を取り出して春田に電話をした。

・・・  
「ここが裏口みたい・・・」  
と小鳥坂は言う。

どうやら病院まで来たみたいだ。

「私はここで待っている・・・それと・・・カードを選んで。」  
と小鳥坂はカードを出した。

「わかった。ソードを借りるよ。」  
と俺は言う。

そして俺は裏口の扉を破り中へと入っていった。

- e n d -

## 第9話（39話）デビス・アンドレス（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを書いていくことになります。

なんかこれからだんだん書いていくことになりそうです。

## 第9話(39話) デイビス・アンドレス

「デイビス・アンドレス。 病院に不審な人物が入りました。」  
と一人が言う。

「知っている。 面白い奴が入ってきたな。 特に何もする必要な  
はいぞ。」  
とデイビスは言う。

・  
・  
・

ザックスは一人歩けるくらいの病院の廊下を歩いていた。

ザックスは1室1室確認していったが同じクラスの奴は居なかった。

奥の方を歩いていくと1室だけ明かりがついていた。

「(あそこだな・・・)」  
と思ったザックスは慎重に歩いて部屋に入ろうとした。

ドンー!!

と突然銃声が聞こえ弾が頭の隣をすれすれにとおっていく。

「あ・・・あの・・・」  
と石田は言う。

「待たせたな・・・」

と俺は目の色が変わっていた。

そしてザックスは英語でオリジンパワーや自分のことを話した。

どうやら相手は術者狩りの中でも上の方だと言っていてここにボスもいると言っている。

相手は銃を捨てて術で攻撃してきた。

俺は借りたソードを使い止める。

「術者狩りのコピーの術はこんなもんなんかよ!!」  
と俺はいいダークボールを打つ。

相手に当たった。

しかし相手は攻撃を止めない。

「困ったやつだな・・・ダークインパクト!!」  
と打とうとした時だった。

「待て!!」  
と声が聞こえる。

「そんなやつと相手をする時間があるなら・・・」  
と男は言つと俺の後ろから相手が攻撃してきた。

しまったと思ったが相手はその場で倒れてしまった。

「所詮命がない奴だ．．．　こんな奴はこのリモコンで殺すこともできるんだよ」

と男は言う。

俺は警戒していた。

男は部屋に入ってくるとようやく顔が見えた。

「はあ．．．．．も．．．．．もしかして．．．」  
と俺は声を上げる。

．．．．  
．．．．

その頃病院の外はザックスの攻撃の爆音を聞いて大騒ぎだった。

ニュースでもそのことを言ってた。

「黒い光．．．　やはり来たか．．．　ザックス・アンドレス」  
と増田は小声で言った。

「こちら増田。突撃部隊は元の位置に戻れ。病院の中は大丈夫だ。」  
と増田は言う。

．．．．  
．．．．

「と．．．．．と．．．．．父さん！？．．．」  
と俺は言う。



「ザックス・・・こんなところで会えるとはな・・・」  
とデビスは言う。

「何を・・・何をしてるんだ・・・父さんは・・・」  
と俺は聞く。

「ちょっとした実験さ・・・」

そう、父さんはイギリスに居たときでもあまりあつたことがない。  
父さんは大学の科学者。何をしていたかは知らないがいつも大学に残っていて家にはほとんど帰ってこない。もう父さんの顔は忘れていたが今、思い出したんだ。

「本当のことを言おう。ここに来た理由はお前のためだ。お前がオリジンパワーと言われるものと近くにいることがわかって危険だと思ったから連れ戻しに来たのさ。」

「それが本当の事なら・・・人質する必要はねえだろ・・・」  
と俺は言う。

「悪いがここにはそのオリジンパワーといわれるものはないんだ。  
今すぐ人質を離してくれ、俺のクラスメイトだ。」

と俺は言う。

「まあ・・・目的がオリジンパワーだけではないんだがな・・・  
今頃オリジンパワーはどうなっているんだろうか・・・」

とデビスは言う。と煙玉を取り出し逃げていった。

「くっ……」

俺は煙で前が見えなかった。

人質にされたクラスメイトは無事にベッドで寝ていた。俺は急いで窓を開け煙を外に出した。

すると向こうから小さな声が聞こえた。

「あ……」

俺はその声をたどって急いで向かった。

真菜が目覚めたそうだった。口には酸素を配る用のマスクをしていたので声が聞こえなかったんだ。

俺は急いでマスクをはずし話を聞く。

「また……助けられちゃったね……」  
と真菜は言う。

「何も気にすることはないんだ。これは俺の問題だから……」  
と俺は言う。

「そうなのね…… 私は待つてるからね……」  
と真菜は言う。俺はうなずきマスクを戻した。

俺は急いで出口へと向かった。

出口には小鳥坂が待っていた。

「ここを誰かが出て行かなかったか・・・」  
と俺は冷静に聞く。

「誰も来なかったわよ・・・それより・・・その傷・・・」  
と小鳥坂は言う。

「先回りされたみたいだ。急いでいかなきゃ・・・」  
と俺は言う。と小鳥坂を連れて駅へ向かおうとする。

そして途中に警察の増田に会った。

「中の様子は・・・」  
と増田は聞く。

「大丈夫だ・・・誰も怪我はない。それより病院から出て行く男を見なかったか？」

と俺は聞く。俺が大丈夫だと言った瞬間に救助隊が病院へと入っていった。

「ああ・・・突然病院の裏からヘリコプターが飛んでいったのは見えたが・・・あれが犯人か・・・」  
と増田は言う。

「そいつを俺は追わなきゃいけない。俺は先に帰る。」  
と言うと俺と小鳥坂は向かった。

「ちょい待て」  
と増田は言う。と新幹線のチケットを渡された。

「姉貴からすべて聞いている。時間に遅れんなよ。」

と増田は言う。

俺はおう。と言い駅へと向かう。

．．．．

その頃のミイナたちだった。

「綾乃！！術者狩りだ！！」  
と言うのはとうやだった。

ちょうど3人は綾乃の部屋に集まっていた。ミイナが家に来ていたからだ。

「こんなときに．．．」  
と綾乃は言う。

するとミイナが突然．．．

「あ．．．み．．．みんな伏せて！！」  
と言う。

すると突然部屋に火がついた。

「うわあ．．．」  
とみんなは言う。

「わ．．．私に任せて．．．」  
とミイナは水の術を使おうとするが

「今は逃げるぞ!!」  
と裕太は言う。

「でも・・・」  
とミイナは言うが綾乃が連れて行く。

外の廊下に出ると術者狩りがアパートを囲んでいた。

「うち・・・ばれてしまったんか・・・」  
と裕太は言う。

そして4人は廊下に出て逃げられない状態になる。火はどんどん迫ってくる。

「（ザックスとの約束・・・）」  
と3人は思っていた。

そして裕太ととうやは攻撃に向かった。

「綾乃！隙を見てミイナを連れて行け！」  
と裕太は言う。

「わかった・・・」  
と綾乃は言う。

・・・

新幹線の中。

「ねえ考樹……いったいどうしたの……」  
と小鳥坂は聞く。

「病室の中で俺の父さんに会ったんだ……」  
と俺は言う。

「お父さん！？ お父さんは……術者狩りなの……？」  
と小鳥坂は聞く。

「違うと思う……父さんは科学者だ…… 何と関係するかわからんがオリジンパワーを狙っているのは事実。急がないといけないんだ。」  
と俺は言う。

小鳥坂は聞かない方がいいかと思いきや、と返事をする。

「そういえば日本には術者が何人いるんだ？」  
と俺は聞く。

「まず、あの3人と私。たしか春田が言うには……全員で7人だったかしら…… あんたの恋人も合わせたら8人だったんだけどね。」

と小鳥坂は言う。

「そうか…… 他の奴は大丈夫なのか……」  
と俺は心配をする。

……

・・・

東京。

綾乃はミイナを連れて逃げようとしていたが術者狩りはアパートを囲んでいて動くことが出来なかった。

「（このままじゃいけないわ・・・）」  
と綾乃は思う。

裕太たちはアパートから飛び降りて術者狩りの相手をしようとしている。

「透哉！無理をするんじゃないぞ！！」  
と裕太は言う。

「大丈夫！」  
と透哉は言う。

するとある術者狩りが

「おい！オリジンパワーはあっちだ！！」  
というみんながそっちへ行った。

「（やばい・・・このままじゃ・・・由紀ちゃんが・・・）」

と綾乃は思ったが術者狩りは早く襲ってきた。

裕太たちも急ぐことが出来なかった。

「（ダメだ・・・）」

と綾乃が思った時だった。

ドン。

という爆音とともに襲ってきた術者狩り達が吹っ飛んで行った。

「（いったい何が・・・）」

と綾乃は思っていた。

裕太たちはこの時間でここまで来れることは出来ない・・・

「悪いのですが・・・同じ術者を傷つけてもらうのはやめてもらえるでしょうか？ 同じ術者が見ているととても腹が立って殺したくなるからね。すぐに引くのが無難ですよ？」

と見たことのない男が言っている。

「（術者なの！？）」

と綾乃は思う。

「うるせえー 邪魔すんじゃないぞー！」

と術者狩りが言つとほかの術者狩りも襲ってきた。

「なるほど・・・要するに術者狩りはバカということなんですね・・・  
・ ・ ・ ならばここで命を捨てる。」

と男は言つと地面に手を着けた。



すると地面が手の方向にまっすぐと切れていく。

「（こんな術見たことない・・・）」  
と裕太は思う。

・・・

術者狩りはその男によって全て片づけられた。

「えっと・・・その・・・ありがとう。」  
と裕太は男に聞く。

「気にしないでください・・・あなた達も術者なんですよ？ 同じ立場なんだから助けられないわけがない・・・」  
と男は言う。

「ああ俺は山崎 裕太。銃術師って呼ばれてるんだ。」  
と裕太は言う。と綾乃たちも紹介する。

「俺は古賀 巧 この通り地面を扱う術。日本語名ではないからグラントマジシャンと呼ばれてます。」  
と巧は言う。

「（いや、この通りって言われてもわからないな・・・）」  
と透哉は言う。

「それより、今回の事態はもちろん知っています。その子がオリジンパワーなんです。」  
と巧は言う。

「今は、俺たちがあずかっているんだが元々は海藤 考樹ていうやつが世話をしている。」

と裕太は言う。

「ザックス・アンドレスですね。」

と巧は真剣な表情でいう。

裕太たちは何かあるのかと思ったが

「こんなところでザックスさんに会えるなんて光栄すぎて・・・もうおかしくなりそう・・・」

と巧が言った時4人は驚きの回答に驚いた。

「なるほど・・・すぐに会えると思いますよ。」

と透哉は言う。

「とりあえず、ここは危険だ。由紀のためにも逃げよう。」

と裕太は言うと5人は場所を移動する。

・  
・  
・

ある車の中。

「オリジンパワーは見つかったか？」

とデイビスは助手席に座っている男に聞く。

「いいえ、まだ搜索中です。」

と男は言う。

「搜索中とは・・・誰かが術者狩りを消滅させたのかね？」  
とデビスは聞く。

「おそらくそう思われます。」  
と男は言う。

「さすが、俺が作った武器だ・・・あんなゴミたちなんて簡単に殺せれるだろうな・・・もうすぐ俺の夢が完成する・・・。」

- e n d -

## 第10話（40話）幻想（前書き）

ども、いつも読んでいただきありがとうございます。

時々日本語がおかしいけど勘弁してください。

時々サブタイトルとどこが関係あるの？って感じになるけど勘弁して下さい。

時々意味が分からなくなるけど勘弁して下さい。

とにかく勘弁して下さい

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを入れて宜しくお願いします。

## 第10話（40話）幻想

### 40話

俺と小鳥坂は東京駅へ着いた。

「小鳥坂・・・ お前は先に由紀のところへ行ってあげてくれ。」  
と俺は言う。

「え・・・ どうして？ あの子たちあんたの助けが必要なのかもしれないわよ？」  
と小鳥坂は聞く。

「俺の助けの代わりにお前に行ってくれて言ってるんだ・・・」  
と俺は言う。

「・・・」

小鳥坂は黙り込む

「俺は少しやらなきゃいけないことがあるんだ・・・ 約束してくれるか・・・？」  
と俺は言う。

「わかったわ。その約束・・・ 私が受けるわ・・・」  
と小鳥坂は言う。

そして小鳥坂と俺は別れて行った。

・  
・  
・  
・

別れた後、俺は真っ先に春田のいる大学へと向かった。

あいつは大学に住んでいると同じもんだ。

大学の門では春田の知り合いだ。と言えはすぐに入れた。

そして俺は春田の研究室へ向かう。

コンコン

と俺はノックをする

「どうぞ。」

と中から声がする。

俺はすぐに中へと入った。

「あら、海藤君ね。大丈夫だった？」  
と春田は聞く。

「ああ、大丈夫だった。俺は少しお前に聞きたいことがあるんだ。」  
と俺は言う。

「答えれる範囲なら答えるわ。」  
と春田は言う。

「結構だ。お前は俺の父でもあるデイビス・アンドレスについて

何かを知っているか？」  
と俺は聞く。

「ええ、知っているわ。     あの人は私をここまで作り上げた人と一緒だから・・・」  
と春田は言う。

「知っているんだな。俺は奇妙なことに北海道の事件が起きた病院で俺の父に当たるデイビス・アンドレスに会ったんだ。正直顔は覚えていなかったが。もう16年ほどあつてないからな。母さんの葬式にも出なかった奴だ。なぜそいつがそこにいる。」  
と俺は聞く。

「詳しいことを言うと・・・私の首も飛んでいくからヒントだけ教えてあげるわ。     あの人はあなたを産んだ父でもありあなた達の力を作った人でもあるわ。」  
と春田は言う。

「!？」

「そんな彼が今、ある大きなプロジェクトを進行しているの。それを成功させないと彼は納得いかないみたいだね。これがヒントだわ。」  
と春田は言う。

「そうか・・・俺のもやもやが全て無くなった。     ありがとな。」  
と俺はいい部屋を出ようとした時だった。

「待って!!」  
と春田は言う。

「あなたはオリジンパワーを守り抜く必要があるわよ・・・」  
と春田は言った。

「当たり前だろ？それが俺の役目だ。」  
と俺はいい出ていく。

今の春田の言葉がヒントではなく答えに聞こえた。

・・・

「しばらくここに隠れていればいいと思います。」  
と透哉は言う。

ここは透哉の実家の地下シェルターだった。あんまり意味がなかったが緊急時のために作られていた。冷暖房もついていた。

「しっかし・・・どれだけの術者狩りが居るんだよ・・・これじゃあキリがないな・・・」  
と裕太は言う。

「そうですね・・・ところでザックスさん達は大丈夫でしょうか・・・」  
と綾乃は心配しながら言う。

「大丈夫だよ・・・ザックスなら・・・必ず助けしてくれる・・・」  
とミイナは言う。

「あっ！！」



とミイナは突然声を出した。

「どうしたの!?!」

とみんなは言う。

「(ザ・・・ザックスが・・・血を・・・血・・・あれ・・・動かなく・・・動かなくなつて・・・な・・・なんで・・・)」

とミイナは完全に目を白くし口を開けて小さな声で呟いていた。

するとミイナは急に動き出してシェルターから出て行くうとしていた。

「どうしたの!?! 由紀ちゃん!?!」

とみんなが言う。

「おい! 由紀を止めよう!?!」  
と巧は言う。

ミイナはいきなり走り出して外へと走っていった。

「ザックス・・・ザックス!?!」  
と言いながらミイナは走っていく。

「お嬢ちゃん・・・ちゃんと前を向いては知っていないと危ないよ・・・」

と男がミイナに声を掛ける。

「あ・・・」

とミイナは言う。

「さてと・・・俺とぶつかったわけだから・・・死んでもらおうか・・・」

と男は言う。とミイナに攻撃をしていく。

「うわあああああ」

とミイナは言う。

すると誰かがミイナの体を掴んで飛ばして行った。

「うう・・・」

とミイナは目を開ける。

「美・・・美月!？」

とミイナは言う。

「あんた・・・勝手に رفتたら危ないっていうことがわからないの  
かな・・・こんなに町は術者狩りでいっぱいだっていうのに・・・」  
と小鳥坂は言う。

小鳥坂は背中に少し傷を負っていった。

「あんたはあいつらのところに逃げておきなさい・・・」  
と小鳥坂は言う。

「確か・・・裕太だったわよね・・・　その子連れて非難しなさい・・・こいつは私に任せて・・・」  
と小鳥坂は言う。

「おう・・・わかった。」

と言い裕太たちはすぐに場所を移動する。

「簡単にオリジンパワーを渡すわけにはいかないんだわ・・・ここからは私が相手よ!!」

と小鳥坂は言う

・・・

「（あの人はあなたを産んだ父でもありあなた達の力を作った人でもあるわ。）」

という言葉がザックスの頭の中をずっと再生されていた。

「（あんな人質をする親父が俺の親父なんて認めネエ・・・それに俺を不幸にさせた力まで作りやがったんだ・・・）」

と俺はずっと思っていた。

俺は走って全員のところへと向かっていた時だった急に曲がり角から待ち伏せしていたように術者狩りが現れた。

「おやおや、こんなところでザックス・アンドレスと出会えると言うことは変わらなかつたんだ・・・ならば・・・殺してもいいわけだな・・・」

と男は突然言ってきた

「どついうことだ!？」

と俺が言った瞬間男は剣を取り出して来た。

「お前は剣を持っていない・・・この期間限定の剣術師に勝てんの

かな？？」

と言ってきた。

俺はひたすらと攻撃を避けていった。

「いい気持ちで戦いにきてんじゃねえかよ・・・ 殺せるな殺せばいい」

と俺は言い攻撃をしようとした時だった。

「ぐはっ・・・」

急に術者狩りの男は倒れていった。そして奥に誰かが立っていた。

俺はまだ攻撃はしていなかった。

「俺の息子を俺の許可なく殺すんじゃねえぞ。」  
と奥にいた男は遺体に向かっていった。

「親父か・・・そいつをまたリモコンみたいなので殺したんだ・・・」

と俺は言う。

「それも、お前らのためだ。それより、事態は変わった。今日19時にこの場所へ来てほしい」  
と親父は言い紙を渡す。

すると親父はどこかへ消えていった。

紙には春田がいる大学のキャンパス内の公園だ。そこは都心がすべて見れるようになってる。

「考樹!!」

と後ろから声が聞こえた。

「ああ小鳥坂にミイナ。」

と俺は言う。

ミイナはザックスを見つけると急に元気を取り戻した。

そしてミイナは俺にしがみつく。

「心配してたんだよ・・・ずっと・・・」  
とミイナは言う。

「もう大丈夫だ。とりあえずここは危険だどこかへ。」  
と俺は言い少し離れたところに逃げる。

・・・

「あ、裕太。小鳥坂さんからザックスさんを見つけて由紀ちゃんも大丈夫ってメールが着たわ」  
と綾乃は言う。

「そうか、それはよかった。こっちも報告があるんだが・・・」  
と裕太は言う。

「事態は変わったみたいだ・・・」  
と深刻なように裕太は携帯を見ている。

-  
e  
n  
d  
-

## 第11話（41話）術者の仲間（前書き）

どうも、最近小説の管理が雑になってきて時々話が繋がってないかもしれませんがご了承ください。

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りをお願いします。

## 第11話（41話）術者の仲間

### 41話

イギリス。

「デイベス博士はどこへ行ったのかね？」  
と男は言う。

「はい、現在日本で奴らの監視をされているかと・・・」  
と違う男は言う。

「まあいい・・・なかなか早く終わらないみたいだからこつちも早く動くことは変えないことにしておこう。リオラ君、道具の方はどうなったかね・・・？」  
と男は言う。

「はい・・・どうやら・・・なかなか動く気配が無くて・・・このままでは・・・」  
とリオラが言った時

「それは予想通りだ。ならば最終手段と行かせてもらおうかね。リオラ君。これを使いなさい。」  
と男は言う。

「こ・・・これは・・・本当にやる気なのですか・・・ドード指揮官・・・」  
とリオラは言う。



「当り前だ・・・早くあの力が欲しいんだよ。これだけの武器があれば、オリジンパワーは簡単に手に入れることが出来る。」  
とドードは言う。

「でも・・・僕には・・・」  
とリオラが言った時

「行っておくが・・・できなかった場合は約束通りだ・・・」  
とドードは言う。

・・・

リオラはイギリス側の人間であり俺たち術者への連絡などをする係りである。何回も術者側を行き来していると次第に仲が良くなり今では友達感覚みたいだった。もちろん、今回イギリスが日本へ攻め込むという連絡を入れたのもリオラだった。術者側はもちろん戦争に行くことを拒否。そんなか今回の指揮官のドードはリオラにとんでもないものを持たせこんだ

「（こんなことは僕にはできない・・・何しろ家族みたいに入れてもらっていた僕が・・・）」  
とリオラは思っている。

そしてリオラは俺たち術者が集まる集会所へと言った。

「あ、リオラ！！　今日も連絡かい??」  
とリオラを見つけたキリヤが言う。キリヤとは幼馴染でもあった。

「ああそうだよ。でも大した用事じゃないんだ。」  
とリオラは言う。

「そつかあ！！じゃあ上がってよ！お茶出すから！！ そのうちボスも来るよ！！」  
とキリヤは言う。

リオラはこの明るい場が好きだった。リオラも英国系日本人である。本当は術を組み込まれるところだったが小さいころから体が弱く術を組み込ませるのは危険だと判断され術は持っていない。

リオラの父は今の指揮官と同じような立場だった。俺はリオラの父が俺の親父と仲が良かったためよくリオラから親父のことを聞いていた。

「お邪魔します。」

とリオラはいい上がると

「おおリオラじゃん。久しぶり。元気にしてた？」  
と聞いてくるのは術者の仲間たち。

リオラはいつもならこの雰囲気ですぐ打ち解けるのだが今回は大事な仕事があるからそんなことは出来なかった。

「ボスもこの階に来るってさ。」  
とキリヤは言う。

「そつか。わかった。」  
とリオラは言う。

「（そういえば昔はキリヤの事が好きだったなー）」  
ってリオラは思い出していた。

そんなことを思い出しているとリオラの心はもつと縛られていった。そう、リオラは特殊なおいが入っている鉄で囲まれた縦20cm×横20cmの箱を持っていた。その空気を吸うと全員の考えていることを操ることが出来るという特殊なものだった。

それをリオラは置いて帰るといのが仕事であつたがとてもこんな空気じゃ出来やしなかった。

「よお、リオラ。」

とボスは言う。

「こんにちは。」

とリオラは言う。

「怒られなかったか？上の方に。」

とボスは言う。

「大丈夫だったです。僕もボスの言っていることに賛成ですから」とリオラは言う。

ボスは日本へ戦争に行くことを拒否したんだ。

「そっか。それで今回はどうした？」  
とボスは聞く。

「いや・・・上の方から様子を見てこいと追い出されて・・・」  
とリオラは言う。

「余計な世話を掛けやがって あのだーど野郎・・・」  
とボスは言う。

2人は一瞬黙りこんだ。

「どうやら・・・何も変化はないみたいですね。」  
とりオラは言う。

「そうだな・・・」

とボスは言う。

「僕も忙しいのでそろそろ帰ります。」  
とりオラは言う。

「もう行くのか・・・ お前も忙しいんだな・・・」  
とボスは言う。

「もう帰るの？」  
とキリヤも言う。

「あんまり時間がないからな。」  
とりオラは言うところを後にした。

例の箱は黙って置いておいた。

・・・

夜の19時

俺は親父との約束通りに春田のいる大学の公園へと向かった。  
大学へは顔見知りのため簡単に入れた。

そこはもうすでに親父が待っていた。

「来てくれたんだな・・・」

と親父は言う。

「話を聞きにな。」

と俺は言う。

「随分と大きくなったんだな。」

と親父は言う。

「ずっと見てなかったからわからねエだけだろ。 普通の親ならわかるぞ。」

と俺は言う。

「そうか・・・ならば言うことを先に言っておこう。」  
と親父は語りはじめる。

「これからイギリスと日本は戦争を起こす事になった。戦争と言っても大きな戦争ではない。ごく一部の人間にかかわるものだ。当初はそんな話じゃなかったが上の人がそうとうお怒りのようなんだ。」  
と親父は言う。

「意味がわかんねエ」  
と俺は言う。

「親父の言っていることの意味が分からないんだ。なぜ戦争になった。どうして親父がかかわる。どうして俺がかかわるんだ！説明しろよ！」

と俺は怒鳴る。

「・・・・・・」

親父は黙り込む。

「そうだな・・・・それもそのはずだ・・・・お前は何も知らないんだもん・・・・」

と親父は言う。

「その通りだよ。それに今は親父の言っていることを信用なんてできねえ。俺は家族だと思ふ必要もないと思ふからな。母さんの葬式にでてねえやつの何を信じたらいいいんだよ。」

と俺は言う。

「・・・・・・」

親父はまた黙り込む。

「説明したいのは確かなんだ。でもな・・・・分かってほしいんだ・・・・時間がない。術、戦争、オリジンパワー、そしてお前がこんなことになっているのは俺のせいなんだ。全部俺のせいだ。それを頭のどこかに入れておいてくれ。俺はこれからの俺の道を探す。」

と親父は言う。と公園を後にした。

「それなら少し親父の道のヒントを教えよう・・・・」

と俺は出ていく親父に言った。

「オリジンパワーと言われるものはためーにはわたせねえからな。」  
と俺は言った。

「ふっ・・・ 意味が分からねエな・・・」  
と親父は言つと消えて行った。

すると話を聞いていたかのように春田がやってきた。

「あんた達は本当に何もお互いのことを知らないのね。」  
と春田は言つ。

「戦争か・・・」  
と俺はつぶやく。

「そうね・・・ あなたには一番きついかもしれないわね。」  
と春田は言つ。

・・・

ミイナと小鳥坂は佑太たちがいる綾乃の家の地下室に行った。

そこではみんなが集まっていた。

「話はこれがすべてだ。 きっと一番苦労するのはザックスじゃねえかな。」

と裕太は言つ。

「そうだよね．．．　ザックスは戦うことが出来なくなるかもしれないよね．．．」

と透哉は言う。

「ザックス．．．」

とミイナは小さい声で言う。

「えっと．．．　ザックスって考樹の事だよね．．．　その．．．　イギリスにいる考樹の仲間が考樹と戦うってこと？」  
と小鳥坂は言う。

「そういうことです．．．　事態は変わってしまったみたいです。」  
と綾乃は言う。

「ここは俺たちしかないということか．．．」  
と巧は言う。

「でもザックスの仲間を殺すということになると．．．」  
と裕太は言う。

ミイナは少し暗い顔をしていた。

．．．．．  
．．．．．

イギリス。

「なるほどな．．．　イギリスもこんな作戦で来たわけか．．．」  
とボスは箱を見ながら言う。



もうその時はみんなドアを突き破って日本へ向かおうとしていた。

「悔しいが・・・どうすることもできない・・・」  
とボスは言う。

キリヤ達はインプットされた集まる場所に集合されていて全員飛行機に乗せられようとしていた。

「もうすぐ暴れることができるから我慢しておいてね。」  
とドードは眠っているキリヤ達に声を掛ける。

リオラはそれを見守っていた。

すると飛行機はイギリスを発ち日本へと向かっていた。

「ドードさん。本当にこんなでいいんですか？」

とリオラは聞く。

「何を言っているんだ。これでイギリスは世界一になれるんだ。  
・・・誰もが見たこののない方法でな。」  
とドードは言う。

・・・

『夕方のニュースをお伝えします。一昨日の高校生人質事件で警察によりまずと病院に取り残されていた生徒は全員無事が確認されました。生徒は北海道から東京へ返され東京で事情調査などを行うそうです。また犯人などの行方などは現在情報が入っていません。』

次のニュースです。』

ニュースでは戦争が起きるなんてひと言も言っていない。

俺は一人家にいた。今は一人になりたかったんだ。小鳥坂から沢山メールが来ていた。

すると見覚えのないメールアドレスの人からメールが来ていた。

『From リオラ

久しぶりです。ザックス。いろいろと情報を集めてアドレスを調べた。

時間がないから急いで書くね。

今回の事はもう知っていると思う。イギリスと日本が戦争になることは。

そのことで先に謝っておきたいんだけど・・・

俺は君の仲間を日本に送った。武器として送った。

いまに思つてとても後悔をしているんだ・・・  
御免なさい。

きつとザックスの事だから仲間への対応は俺と同じことだと思つ。

本当に悪いけど。よろしく。』

というメールだった。一瞬ふざけているようなメールに見えたが終わったことを言ってもしょうがない・・・と俺は思っていた。

『時間がない・・・なぜ全員そついうんだ。』  
と俺は思っていた。

もう戦いはすぐそこまで来ていることを知らなくて。

## 第12話（42話）ブラックリスト（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

## 第12話（42話）ブラックリスト

### 42話

俺はとりあえずミイナの事が心配になりみんなが居るところへと向かった。

トントンと俺はノックをする。

ノックをしても誰も反応しない。

俺は

「おいザックスだ。」  
という。

すると扉が開いた。

「ああザックスさんだったんだね、驚いたよ・・・」  
と警戒心を高めていた綾乃が言う。

「悪かったわ・・・ ちょい気になってな。」  
と俺は言う。

「そうですか・・・ まあとりあえず上がって。」  
と綾乃はいい俺は上がる。

「ザックス・・・」

といつもより元気がないようにミイナが言う。

「どうしたんだよ・・・？」

と俺は言う。

するとミイナは走ってきて俺の腰辺りを抱き

「ごめんね、全部……私のせいで……私が早く捕まっていれば・  
・こんな戦いには……」

とミイナは泣きながら言う。

俺はそんなミイナに

「どうしたんだよ。急に。俺は一つもそんなこと思ってねえぞ。

俺はもちろん戦うつつもりはないし仲間を傷つけたくもない。」

と俺は優しく言う。

「そうだよ。私もそんなこと思ってないわ。」

と小鳥坂が言うともみんなが続いて言う。

「ザックス、話が分かっているみたいなら話は早い。」

と裕太は言う。

「ああ、もちろん」

と俺は言う。

「とりあえず、俺たちもお前の仲間を傷つけたくはない。まあお前  
だけの仲間じゃないからな、姉ちゃんもミイナもだ。それでいろいろ  
と作戦を立てた。その前に紹介しておきたんだ。この人は日本に  
いる術者の一人、巧<sup>たくみ</sup>だ。」

と裕太は言う。

「あ、ザックス・アンドレスさんですね。はじめまして。本  
当は別の形で会いたかったけど今回はこんな形で会うとは思って  
いませんでした。」

と巧は言う。

「こちらこそ。俺も本当はもつといい形で会いたかったな。」  
と俺は言う。

「そういつわけだ、じゃあ作戦を言うぞ。」  
と裕太は言う。

・・・

裕太はいろんなパターンの作戦を全員に伝えた。

全員小型のGPS付き無線機を持ち外へ出る。 全員別々の行動する。

綾乃と透哉はこの部屋に残り透哉はミイナの守り綾乃はPCで全員の位置を確認しながら指令をするということになった。

「それで、目的なんだがな・・・」  
と裕太は話を続ける。

「多分、ザックスの父さんが何かの手がかりだと思う。」  
と裕太は言う。

「ザックスの父さんが今回の進行役ではないのかと思うんだ。春田にも電話で聞こうかと思ったが昨日から電話に出ないんだ。きつとあそこらへんに何かがあるはず。」  
と裕太は言う。

「でも、考樹の父さんに会っただけで止めることができるの?」

と小鳥坂は聞く。

「それはわからない・・・もしかしたらザックスの仲間たちとイギリスから一緒に来る可能性もある。」

と裕太は言う。

「それは分かり次第綾乃から言ってもらうことにしよう。」  
と裕太は言う。

「そういう訳で俺は戦いながらその真相をつかみに行く。巧、小鳥坂さんとザックスはひたすらと術者狩り達をミイナから離していくようにしてくれ。」

と裕太は言う。

「割とシンプルな作戦なんだな。」  
と俺は言う

「今回ばかりわな。」  
と裕太は言う。

・・・

大学内

「ねえデイベス。今回ここまでする必要があるのかしら・・・」  
と春田は言う。

「俺もそんなつもりはなかったが上がそうっているんだ。どうしようもない。」  
とデイベスは言う。



「そうよね．．．．　もしオリジンパワーがあなたの物になったら  
どうするの？」

と春田は聞く。

「とりあえずイギリスはもつと強い武器を作れと言ってくるだろう。  
だが、子どもたちが術なしで生きていけるものを作りたい。」  
とデイビスは言う。

「その点には協力出来るわ。」  
と春田は言う。

「でも、全てこれで終わると思うんだ。　あの話と同じになるのだ  
ったらな。」

とデイビスは言う。

．  
．  
．  
．

「それじゃあここら辺から別れようか。」  
と小鳥坂は言う。

「そうだな．．．．」  
と俺は言う。

「私もなるべく頑張るわ．．．．」  
と暗い俺の表情を見ている。

「ありがとう．．．．」  
と俺は言う。

「ところで、斉藤たちはどうなった・・・？」  
と俺は別れようとしていた小鳥坂に聞く。

「真菜は回復しているみたいわ。でも斉藤に関しては・・・まだ意識が戻らないみたい。」  
と小鳥坂は言う。

俺はその言葉に驚いた。

「そうか・・・じゃあ行くか・・・」  
と俺はいい２人は戦いへと行く。

・・・

成田空港管制塔

「大変です。不審な飛行機が着陸の要請をしています。」  
と管制塔にいる一人が言う。

「どんな飛行機だ？」  
ともう一人が言う。

「ホーイング７６７だと思われますがそんな便はないはずですよ。」

「新しい情報が入りました。着陸を今すぐ拒否しないと空港へ突っ込むと・・・」  
ともう一人が言う。

「わかった。とりあえず許可を出せ、そして警察にすぐ連絡だ・・・」

」

・・・

「着陸しました。警察がすぐに向かっています。」  
という。

「よし、後は他の飛行機の指揮をするんだ。」  
と言う。

ドーン

「ば・・・爆発です。煙がすごいです。」  
と一人が言う。

「大変です、この爆発の煙によって第2滑走路に着陸する飛行機が  
着陸を失敗しました。」  
ともう一人が言う。

「緊急事態発生」

と管制塔室にサイレンが響く。

・・・

「敵か・・・仲間・・・敵・・・仲間・・・」  
と俺はずっとベンチに座って言っている。

「（そりゃ、ミイナも心配するよな・・・こんな事態になったら）」

と思っていた時だった。

「ザックス・アンドレス ブラックリストの人物を発見・・・」  
と突然声がした。

「テ・・・テイト!？」  
と俺は言う。

- e n d -

### 第13話（43話）日本対イギリス（前書き）

ども、いつも読んでいただきありがとうございます。

だいたいこの話も最後まで書いてきたんですけど・・・最後の最後が思いつかない・・・ここらへんぐらいまで順調だけでもしかしたら最後辺りはしばらく更新がおそくなるかもしれませんが宜しくお願いします。

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを入れて宜しくお願いします。

## 第13話（43話）日本対イギリス

### 43話

『昨日の成田空港の不審飛行機着陸事件は不審飛行機が着陸した直後大きな爆発音とともに煙を出しました。その煙によって隣の滑走路で着陸をしようとしていたところ着陸失敗し乗員全員死亡しました。また、不審飛行機は煙が消えたころパイロット・機長は死亡しており機内には誰もいませんでした。警視庁によりますと・・・』

「とうとう来たんだね・・・」

と綾乃は言う。

「そうですね・・・」

と巧は言う。

綾乃たちはミイナにこのニュースを見させないようにした。

・・・

・・・

「テ・・・テイトなのか・・・？」

と俺は言う。

「・・・」

テイトはこっちを向きながら何も言わない。

「なあ・・・目を覚ましてくれよ・・・ お前は操られているだけだ・・・」

と俺は言う。

するとテイトはいきなり攻撃をしてきた。

「っち……」

俺は攻撃をかわす

「おい！ 俺だよ！ 気づいてくれ！」

と俺は言うがテイトは攻撃を止めない。

「なあ……見えてるか……」

と俺は言うがテイトは攻撃をどんどん早くしていくばかりだった。

「一緒に旅をしたよな……」

と俺は言いながら攻撃をかわしていく。

ザックスは攻撃をかわしていくと後ろの壁まで来てしまった。

「くそ……動けないか……」

テイトはナイフを手に持ち今でも殺そうとしていた。

「いい加減気づいてくれないか…… これは間違ってるんだ。

目を覚ませるのはお前だけだ……」

と俺は言う。

するとテイトはナイフを大きく振り俺の顔を刺そうとした

・  
・

「悪いけど……いくら仲間でも仲間のミイナは渡すことが出来な

いんだ。」

と俺は言いながらテイトのナイフを俺の手で止める。

ナイフが少し手に刺さっていて血が流れていた。

「悪いが許してくれ・・・テイト・・・」

と俺は言うで一発腹に殴った。

テイトは少し飛んでいく。

「俺だつて辛いんだ・・・でも・・・これはお前じゃない。  
操られているだけだ・・・許してくれ・・・」  
と俺はいいダークボールをくらわす。

・・・

「（こいつらね・・・考樹の仲間は・・・）」  
と小鳥坂は思う。

「お嬢さん、オリジンパワーの場所を教えてください・・・」  
と言ってくる

「（とりあえず、こいつを倒さないと・・・考樹・・・由紀・・・  
ごめんね）」  
と俺は言う。

「悪いけど・・・教えないわ・・・私は約束しているから・・・」  
と小鳥坂はいい



「サイクロンカード!!」  
と言い攻撃をする。

「ふっ・・・ こんなんじゃあめえーんだよ!!」  
と相手は攻撃をしてくる。  
「ぎゃあ!!」

相手は風を使ってくる。

「う・・・腕が!?!」  
と小鳥坂は言う。

「今度は首が飛んでいくぞ? 早く教えないとよ?」  
と相手は言う。

・・・

「(大学に行く前に邪魔を処理しないといけないか・・・)」  
と裕太は思う。

「私にオリジンパワーの場所を教えないとここで死にますよ?」  
とルメリは言う。

「(しかし、全員ザックスの仲間なんだよ・・・ 殺すわけにはいかないもんな・・・)」  
と裕太は思う。

「お前は剣術師か・・・」

と裕太は小さい声で言う。

ドン！！

裕太は攻撃をするがルメリは剣で弾を止める。

「なかなかやんじゃねえか。」

と裕太は言う。

「早く教えなさい・・・」

とルメリは言うつと襲ってくる。

「っふん・・・俺の銃を顔面にくらうんだな！！」

と裕太は言うつとルメリの剣は急にでかくなった。

「な・・・何！？」

と裕太は言う。

「ぐわあああああああああああ」

・・・

「ぐわあああああああああああ」

と急にミイナは声を出す。

「どうしたのミイナ！？」

と綾乃はすぐに声を掛ける

「ま・・・また・・・」  
とミイナは言う。

「落ち着いてミイナちゃん。」  
と綾乃はミイナのところへ行く。

「大丈夫・・・あなたの予知夢は必ず変わるから。あの人たちなら  
変えられるんだから」  
と綾乃は優しく言う。

「う・・・うん。」  
とミイナは落ち着く。

「ねえ綾乃・・・ GPSがさっきから動いてないぞ。」  
と透哉は言う。

「変ね・・・ もしかいて・・・」  
と綾乃は言う。

「動いているのはザックスだけか。」

・・・

「（痛い・・・）」  
と小鳥坂は言う。

「どうしたんだい・・・ まだ吐かないのかい・・・？ 早くしてくれよ。君の首も切れちゃうんだよ!？」  
と相手は言う。

「いう訳ないじゃない．．． 私は．．． 約束を守るんなら．．．  
死んでもいいわ．．．」

と小鳥坂は言う。

「そうかい．．． ならば．．． 本当に行かさせてもらおうじゃないか．．．」

と相手は言う。

「（ダメだ．．． もう体力も少ない．．．）」  
と小鳥坂は思う。

「碎き散れ．．． さようなら．．．」  
と相手は言うと攻撃をしようとする。

「待て！」  
と声が聞こえた。

「誰だ？」  
と相手は言う。

「（ザックス．．．？）」  
と小鳥坂は思う。

「ウインドか．．． 久しぶりだな。」  
と俺は言う。

「ザックス．．． か．．． なんだい？この娘を助けにでも？」  
と相手は言う。

「ごもつともだ・・・」  
と俺は言う。

「まあいい、こいつは死にかけだ。お前に話を聞こう。」  
と相手は言う。

「俺は仲間だと思わねエ奴にはそんな大切なことは言えねエンだな。」  
と俺は言う。

「ほお、俺たちを仲間じゃないと・・・？」  
と相手は言う。

「そうだな、今のお前らはな。」  
と俺は言う。

「なるほど・・・それじゃあ仲間じゃネエからお前も砕いていいんだな？」  
と相手は言う。

「そういうことだ。」  
と俺は言うとウインドは攻撃をしてきた。

「ザ・・・ザックス!？」  
と小鳥坂は小声で言う。

ドゥーーン!!

辺りは煙ですごくになった

「今はお前を仲間と見ない。だから少しの間ここで倒れていてくれ。」

と俺は言つと小鳥坂のもとへと行く。

「大丈夫か!？」

と俺は言つ。

「うん、ごめんね。いろいろと迷惑かけて。」

と小鳥坂は言つ。

「お前はとりあえず病院へ行くんだ。それと・・・」  
と俺は言つ。

「(それと?)」

と小鳥坂は思つ。

「この戦争が終わつたら話したいことがあるんだ。だから死ぬんじやねえ。」

と俺は言つ。

「(話したいこと?え、なんなの?)」

と小鳥坂は思つが俺は救急車を呼ぶ。

気づくと小鳥坂は意識を消していた。

「(なんで、こんなことになっているんだ・・・ あいつらもだいぶ力を上げている・・・ 本当に・・・ ミイナを守るのか・・・)」

- end -

## 第14話（44話）浅島 奈海（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。最後の締め方がよくわかりません。

第14話（44話）浅島 奈海

44話

「（ぐはっ・・・このままじゃ・・・死ぬ・・・）」  
と裕太は思っていた。

裕太の腹には思いっきりと剣が刺さっていた。

「もうそろそろ死ぬときかしら・・・」  
とルメリは言う。

「お前ら・・・本当に強いんだな・・・」  
と裕太は言う。

「オリジンパワーのためならなんでもします。」  
とルメリは言う。

「そうか・・・ザックスは・・・こんな奴らの仲間だったのか・・・  
俺はこんな奴らの仲間と友達だったのか・・・残念だ・・・」  
と裕太は言う。

「うるさい！ あんたは黙って血でも流しておきなさい！」  
とルメリは言う。

「悪いが・・・こんな死に方は嫌だな・・・俺はもう一度・・・」  
と裕太は言いながら立ち上がる。

「もう一度！！！！戦うんだよ！！！！」



と裕太は言いながら走っていく。

「バカ野郎。」

とルメリは言いながら剣を構えるが前には裕太が居なかった。

「バカはどつちだ・・・ここだぞ、てめえ・・・」

と裕太は相手のすきをみてルメリの後ろへといた。

「なるほどね・・・それで殺すわけですね」  
とルメリは言う。

「ふっ・・・約束を一つ破ることになるかもしれないがな・・・」  
と裕太は言う。

「お前に言っても意味ないかもしれないけど・・・俺はザックスに・・・あえて良かった・・・ずっと姉ちゃんのことしか思っていなかったけど・・・あいつに会って本当のことを聞いてからは・・・とても楽しいんだ・・・そんな人に会えたんだ・・・俺は幸運・・・な奴だ・・・できたら・・・お前らにも・・・姉ちゃんと一緒に居てくれて・・・って言いたかったんだが・・・」

と裕太は言う。

「（やばい死ぬ・・・とりあえず麻酔注射を・・・）」

と裕太は麻酔注射を持ちルメリに刺す

「あっ！！」

とルメリは言うと言ってしまった。

「（さてと・・・俺も・・・終わりか・・・）」

と裕太は思う。

・  
・  
・  
・

「デイビス教授。術者たちは3人戦闘不能が確認され相手は残り2人になりました。」

と監視係は言う。

「そうか、残っているのはザックスか？」  
とデイビスは聞く。

「その通りです。」  
と監視係は言う。

「面白くなってきたな・・・」  
とデイビスは言う。

「あなた・・・やり過ぎじゃないかしら・・・」  
と春田はデイビスに言う。

「悪いが、イギリスは子どもたちにどれぐらいの力をつけたかは知らないからな・・・」

とデイビスは言う。

・  
・  
・  
・

「ザックス！聞こえる？」  
とザックスの無線から聞こえた。

「おう聞こえる。」

と俺は言う。

「裕太も戦闘不能になったわ・・・」

と綾乃は残念そうに言う。

「そうか・・・」

と俺は言う。

「とりあえず、ザックスは裕太の代わりに大学へと向かって。」

と綾乃は言う。

「わかったそうする。」

と俺はいい大学へと向かう。

すると前から術者が現れた。

「うち・・・術者もいんのか・・・」

と俺は言う。

「ほらよ、相手してやんぞ。」

と俺は言うつと沢山の術者に囲まれていた。

「うち・・・落とし穴にはめられたわけか・・・」

と俺は言う。

「どうだ！ザックス・アンドレス！！　これでお前も終わりだ。」  
と術者狩りは言う。

ザックスが攻撃をしようとした時だった向こう側から術者狩りが倒れていくのが見えた。

「透哉か？」

と思いとりあえず術者狩りを倒して行つた。

・  
・  
・

「ふう・・・ だいぶ時間がかかったな・・・」  
と俺は言う。

「ザックス・アンドレスさんですね？」  
と一人の女が言う。

「ああそうだけど・・・ お前は・・・？」  
と俺は言う。

「あ、私は水術師の浅島あさしま 奈海なみです。日本の術師の一人です。」  
と奈美は言う。

「ああ・・・ そうなのか・・・ で、なんでここに？」  
と俺は言う。

「今回の話を聞いて助けに来たのです。話は全部綾乃さんから聞いてます。ザックスさんは先に大学へと。」  
と奈海は言う。

「おおそうか・・・ ありがとう。」  
と俺はいい大学へと向かう。

・  
・  
・

イギリス

「ドード様、面接を希望している方が。」  
と言う。

「誰だね？」

とドードは言う。

「術師のボスです。」  
と言う。

「そうか、入れるんだ。」  
とドードは言う。

・  
・  
・

「久しぶりだな。ドード。」  
とボスは言う。

「そっちこそ来るとは珍しい。」  
とドードは言う。

「そうだな。ここに来るつもりは無かったんだが。お前の行動がどうしても気に入らなくてな。」  
とボスは言う。

「まあ落ち着け、これでイギリスも最大の権力を持つことが出来る・  
・・そうすれば・・・」

とドードが言った時

「ふざけるな!!! お前はその権力を掴み何をするんだ! それでイギリスは変われると思ってるのか!? オリジンパワーを掴んでも権力が掴めれるのではなく軍勢力しかつかめないんだ! 私はそんなものには必要はない。子どもたちがこれ以上傷つくのは見たくない。止めてくれ・・・今すぐにこの計画を止めてくれ!」

とボスは言う。

「そうだな・・・悪いが今言ったのは全てうそだ。すまん。」  
とドードは言う。

「どういうことだ!？」  
とボスは言う。

「オリジンパワーの話思い出してくれ。昔、あるイギリスの貧乏な町は大火災を起こしてほとんどの家が全焼し家を建てるために隣の大きな町から多額の借金をする。借金をした町は街のみんなが頑張って働いたが農作物は豊富に育たずなかなか借金を返すことが出来なかった。

そんな町に偶然自称特別な力を持っていると言った男が現れる。その男は町のために雨を降らしたり緑を増やしたり土地を豊かにしたりする力を使い村は借金を返すことが出来た。

隣の村はその話を聞くと割る知恵を働かせてもつとお金を取ろうと思いい借金が足りていないと言ったのさ、隣町は無理やりこの町からお金を取ろうとした。この町はお金を返す必要がないと思いつつと返さなかったら隣町は戦争を起こした。その男は心が弱く町の人が戦争をしているのを見ると心が苦しくなり悪の顔を見せる。

悪の顔を見せた男は相手見方を関係なく殺し最終的には心をコント

ロールできなくなり世界を滅亡させる力を使う。そして世界は新しくなった。

という話なんだが、もちろん知っているよな？」  
とドードは聞く。

「それが術の起源と呼ばれている話だろ。」  
とボスは言う。

「そうなんだよ。その通り。もし、この話が本当なら戦争を見たオリジンパワーは心をコントロールできなくなり悪の顔を見せる。そして……」  
とドードは言う。

「まさか……こんな話があり得るわけ……」

「そうなんだよ……最初はこんな話誰も信じなかったよ。でも見つけてしまったのさ、デイベス・アンドレスは。オリジンパワーをね……最初はみんな驚いたよ。こんな話が本当だったなんてありえないんだから。そしたら……私の仮説もありえないのではないのでは？」  
とドードは言う。

「ドード……本気が……？」  
とボスは聞く。

「僕もそう願いたくはないんだけどね……」

- e n d -

## 第15話（45話）人類滅亡（前書き）

予定23話ぐらいで終わるつもりです。ていうか終わります。  
第3期は・・・話が思いつけばやります。

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでもいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを書いてください。



## 第15話（45話）人類滅亡

### 45話

「デイベス、オリジンパワーの話があったわよね・・・」  
と春田はデイベスに言う。

「ああ」

とデイベスは言う。

「今回の事とその話って似ている点があると思わないかしら？」  
と春田は言う。

「そうだな。そういうことになってるんだよな」  
とデイベスは言う。

「イギリスに帰ってドードを止めた方が？」  
と春田は聞く。

「止めたって無駄さ。あいつが言うことを聞くわけがない。」  
とデイベスは窓から外を見ながら言う。

「それじゃあ、あなたの目標は人類滅亡なの？」  
と春田は聞く。

「そついう訳でもない。」  
とデイベスは言う。

「はつきりしてよー!」  
と春田は言う。

「俺だつてわかんねんだよ!! 俺は・・・俺は・・・オリジンパワーを使えば今までしてきたことをやり直すことが出来るかと思っていた!! でも・・・でも・・・俺だつてオリジンパワーを奪い合う戦争なんてするはずじゃなかった。してはいけないんだよ! だけでもう手遅れだ・・・」  
とデビスは言う。

「そうね・・・でも、私はこう思うんだ。あなたの子どもならやってくれるんじゃないかしら?」  
と春田は言う。

「どういうことだ。」  
とデビスは聞く。

「あの子はおなたとそっくりだから、きっと何か新しい道を導いてくれるわ。大丈夫。」  
と春田は言う。

「そうか・・・」  
とデビスは言う

・・・

俺は術者狩り達に見つからないように大学へと向かっていた。

「はあはあ・・・着いた・・・」

俺は大学へ入り春田の部屋へと向かった。

ガラッ

俺は急いで扉を開けた。

「動くんじゃない!」

と俺はいい綾乃に言われたとおりに銃を春田に向ける。

「どうしたのかしら・・・」

と春田は言う。

「俺の・・・俺の親父はどこへ行った・・・」

と俺は言う。

「ああ、さっきまで話してたんだけど ちょっと頭が痛くなつたと  
言つてどこかへ言つたわ・・・ とりあえずその銃を下ろそう。

話があるんだ。」

と俺は言われ銃をおろし部屋に入ることにした。

「はい、コーヒー」

と春田は出す。

「ありがとう。 悪いが今日は全て俺の質問に答えてくれ。 頼む。」  
と俺は言う。

「わかつたわ。 その代りに私の話もきちんと受け止めてくれるかし  
ら?」

と春田は言う。

「いいだろう」

と俺は言う。

「お父さんと返事の仕方がそっくりだね。」  
と春田は笑う。

「そうなんか・・・」  
と俺は言う。

「俺の親父は何のために日本へいるんだ。」  
と俺は聞く。

「オリジンパワーの力を必要のためよ。でも正確に言つとあなた達のために来てるんだわ。」  
と春田は言う。

「俺たちのため？どういうことだ？」  
と俺は聞く。

「私はそれを本人から聞いた方がいいと思うわ。きっと私が言つてもあなたは信じないでしょ。」  
と春田は言う。

「わかった。」  
と俺は言う。

「それじゃあ次だが・・・オリジンパワーについて詳しく聞かしてくれ。」  
と俺は言う。

「そうね、オリジンパワーの話をしてあげるわ。」  
と春田は言つとオリジンパワーの話を始めた。

・  
・  
・

「戦争？人類滅亡？・・・ どういうことだ・・・」  
と俺は聞く。

「オリジンパワーっていうのはね沢山の力を持っているんだわ。  
まるで神のように。その中の力の中に悪の顔というのがあってその  
中に人類を滅亡させるほどの力があるらしいわ。」  
と春田は言う。

「うそだろ・・・それをミイナが持っているのか・・・」  
と俺は言う。

「残念ながらそうね・・・ 私の研究でも由紀ちゃんがオリジンパ  
ワーを持っているのは事実だから。」  
と春田は言う。

「それじゃあ・・・その悪の顔にさせないにはどうすれば・・・？」  
と俺は驚きながら聞く。

「そうね・・・ とにかく彼女には負担を掛けないことだわ。 と  
いても・・・ 彼女はどうかやら未来予知をする術も持っているみ  
たいで負担を掛けないのは無理かもしれない・・・」  
と春田は言う。

「じゃあこの戦争を止めることは！！！！」  
と俺は怒鳴る。

「・・・」

春田は黙り込んだ。

「不可能・・・ってどこかしら。」  
と春田は言う。

「そんな・・・」  
と俺は言う。

「最初あなたにはオリジンパワーを守り抜きなさい。と言っただけ  
それは撤回させてもらっわ。」  
と春田は言う。

「どういうことだ？」  
と俺は言う。

「世界を守りたいのならあなたの手でオリジンパワーを殺しなさい。」  
と春田は真剣に言う。

俺は地面に座り込んでしまった。

すると春田は俺を抱きしめ

「考樹君。私はあなたを信じてるわ・・・ あなたがこの未来を導  
いてくれる人になることを・・・」

・・・

「集中・・・集中・・・戦うことに集中・・・」  
と透哉は考えていた。

「よし・・・ ストーンインパクト!!」

巧は術者狩りに攻撃をしていく。

「これで片付いたか・・・」

と巧は思っていた。

「はいはい、上等上等」

と拍手をしながら向こうから女は歩いてくる。

「（あれ・・・ 呪われたザックスの仲間たちってこんなにはつきり喋るんだっけ・・・）」  
と巧は思っている。

「お姉さんオリジンパワーっていうのを探してるんだけど君は知っているかな？」

と女は話しかけてくる。

「悪いけど、オリジンパワーの場所は教えられないけど・・・」  
と巧は言う。

「そうかい・・・ 最近の子どもって口が堅いんだね・・・ ならばその口を無理やりあけましょう・・・!!」

と女は言う。と巧に襲いかかってきた。

「うわぁ!!」

## 第16話（46話）悪の顔（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを入れて宜しくお願いします。



## 第16話（46話）悪の顔

46話

「そうかい・・・最近の子どもって口が堅いんだね・・・ならばその口を無理やりあけましょう・・・!!」  
と女は言う。と巧に襲いかかってきた。

「うわぁ!!」

キーン

と激しい音がした。

巧の前には2人いた。

「よそ見してたら死ぬところだったわよ・・・」  
と奈海は言う。

「あなたは・・・」  
と巧が言おうとすると

「説明は後よ。とりあえず手伝いなさい。」

と奈海は言う。

「あんた術者狩りでもなくザックスさん達の仲間でもないみたいね。」  
と奈海は言う。

「そうよ、私はただ単独でオリジンパワーを手に入れようとしているからね・・・」

と相手は言う。

「単独でもグループでも私たちは渡さないからっ!!」  
と奈海は言う。

「なるほどね、その意気込みは気に入ったわ。でもね、そういう訳にはいかないんだ。」  
と相手は言う。

「アイアンハンマー!!」  
相手は攻撃をしてきた。

奈海は避けるが相手は連続で攻撃をしてくる。

「なんで!?!」

と奈海は言つと

「ぐはっ・・・」

攻撃が当たり飛ばされる。

「あんなに強気だったのにこんなに早く死ぬとわね・・・ 今度はあなたの番よ。どうするかしら?」  
と相手は言う。

「もちろん・・・戦うよ。」  
と巧は言う。

「あなたはいろいろと間違っているわ。戦うんじゃなくて死に行くんだよ？」

と相手は言うともた攻撃をしてきた。

・  
・  
・

「ザックスさん。3丁目のスーパー辺りで巧さんと奈海さんが何者かと戦っています。」

と綾乃は無線でいう。

「それはどういうことだ。何者かって？」

とザックスは走りながら無線に言う。

「そうですね・・・術者狩りでもなくザックスさん達の仲間でもないという事です。」

と綾乃は無線でいう。

「なるほど・・・3つの集団が来ているという訳か。」  
とザックスがボソツと言っていると

「そうなんだよなあー！！その通りだよ！！  
君　　！！」  
頭のいい少年

と後ろから声が聞こえ後ろを振り向くと

「おせえーよ」

と言い相手はザックスの腹を思いつきり殴る。

「うち・・・てめえは誰だ・・・」

と俺は言う。

「ヒイエー名乗るほどもねえよ。どうせテメエは死ぬんだからよ。ヒッヒッヒ」

と相手は言う。

「俺たちはただの術者狩りでもなくお前の仲間でもねえよ。アメリカの術者だよオー!!」

と相手は言う。

「アメリカ・・・アメリカでも実験があるわけか・・・」  
と俺は地面に座り込んでいう。

「余計なこと考えなくても良いぞオー!!　すぐに楽にしてやらよ!!」

と相手は言うと言早いスピードで攻撃をしてくる。

「消えた!？」

とザックスは言う

「後ろだよ　バアーカ!!」

と言い相手はザックスを思いつき蹴る。

「なんだよ!!　術者の中で強い力を持つてる奴はこんなもんなんかよ!!　俺らより雑魚じゃねえか。」

と相手は言う。

「くっ・・・死ぬ前に・・・聞かせてもらおうか・・・　お前らはオリジンパワーを使って何をするんだ？」

とザックスは倒れこみながら聞く。

「はぁ？お前らそんなこともしんねえのか？俺たちは最強の力が欲しいんだよぉ！」

と相手は言う。

「そうか・・・要するに自分たちで使うためな・・・」  
と俺はそういうと立ち上がる。

「悪いがオリジンパワーを持っているのは俺の大事な仲間なんだよ・・・」

ザックスは背中から黒い光を出しながら相手に近づく。

「仲間がなんなんだよ・・・ハハハ今は世界が狙っているものなんだぜ！？お前の好き勝手にはイカねエンだよ！！」  
と相手は言う。

ザックスはどんどん近づいていく。  
相手もそんなザックスを見て少しひるんでいる。

「そうなんだよな。俺も勝手にあいつのことを守ってたんだよ。誰のためでもネエ。俺のためなんだよ。」

と俺は言いながら相手に近づく。

「うるせえーこっち来るんじゃネエー！！」  
と相手はいいザックスを蹴り飛ばす。

しかし、ザックスはもう一度立ち上がり敵に近づく。

「悪いけどオリジンパワーを入手するのはあきらめてくれないかな

「？ねえ？」

と俺は相手の後ろの肩をたたく。

「何！？体が・・・体が動かない・・・」

と相手は言う。

「影・・・出てますよ？」

と俺は言う。

「残念だな。」

と言いダークインパクトを至近距離でくらわす。

「ぐはっ・・・」

と相手は言い倒れこむ。

・・・

「さてと、お姉さんも時間がないから・・・そろそろ殺させてもらうわ。」

と相手の女は巧に言う。

「よっぽどオリジンパワーが欲しいんだね。」

と巧は言う。

「そうよ・・・その通りよ。」

と相手の女は言う。

「でも、僕たちを倒してからにしてくれないかな？」  
と巧は言う。

「僕たち？」

と相手の女は言う。

「そうよ、私達よ。」

と奈海は相手の後ろから言う。

「!？」

「ファイヤーインパクト!!」

と巧は言う

「ウォーターインパクト!!」

と奈海は言う。

「ぎゃああああああ」

と言いながら相手は倒れこむ。

「ふう・・・とりあえず片付いたか・・・」

と巧は言う

「えっと・・・あなたは・・・」

と巧は聞く。

「奈海よ、水術者。とりあえず、話は聞いているわ。」

と奈海は言う。

「そうか、俺は巧っていうんだ。一応炎術師だ。」

と巧は言う

「ふふふっ・・・炎と水って相性悪いよね・・・」

と奈海は笑いながら言う。

「まあそうだよな・・・」

と巧も笑いながら言う。

・・・

・・・

イギリスの会議にて。

「ドード、本当にこのまま人類が滅亡するという方向でいいのか。」  
と一人の男は言う。

「そうだ。この国も滅亡するんだぞ？」  
ともう一人の男も言う。

「お前らは勘違いしているな・・・誰も人類が滅亡する方向に行く  
とはいつておらんぞ？」  
とドードは言う。

「しかし、お前が戦争を止めないことにはそういう運命になるんだ。  
わかっているだろ？」  
ともう一人が言う。

「まあこのことはオリジンパワーの話を最後まで知っているやつじ  
やないとわからないな。」  
とドードは言う。

・・・

・・・

ボスはドードのところを後にし帰ろうとしていた。



「（ドードは本当に信じているのか・・・そんなことを・・・）」  
とボスは思っていた。

「あの・・・すみません。」  
とボスの後ろから声がした。

「おお、リオラか・・・」  
とボスは言う。

「あの・・・本当にごめんなさい。」  
とリオラはボスの前で座りこみ言う。

「ああ・・・あの件か・・・」  
とボスは言う。

「僕は・・・本当は・・・するつもりなんて・・・」  
とリオラが言う。

「いいんだ・・・わかっている・・・」  
とボスは言う。

「きっとザックスならやってくれるさ・・・」  
とボスは言う。

・・・

この日は全員一回綾乃の家のシェルターに集まる日だった。

「みんな2日間お疲れ様。」

と綾乃は言いながらお茶を出す。

「ああありがとう。」

とみんなは言う。

全員テーブルに座ると綾乃は話し始めた。

「とりあえず、今は小鳥坂さんと裕太が重症のため病院に運ばれているわ。裕太は意識を戻したけど小鳥座さんに関してはまだ意識が戻っていないわ。」

と綾乃は言う。

「そうなのか・・・」

とザックスは小声で言う。

「病院にはたくさんの警備が配置されているから大丈夫だと思われるわ。」

と綾乃は言う。

「それで、ザックスさんと巧さん達がアメリカの術師と会ったのよね？」

と綾乃は聞く。

「そうです。」

と巧は言う。

「アメリカの術師は多分もう出てこないと思うわ。アメリカの術師を調べてみたけどそんなに人数がいなしみんな歳を老いているみたい。」

と綾乃は言う。

「なるほどな。」  
とみんなは言う。

「そして、ザックスさんの仲間は全員で10人。その中で戦闘不能なのは5人まで行っただわ。」  
と綾乃は少し残念そうに言う。

「ああ、みんな・・・あんまり気にしないでいいからな・・・」  
とザックスは言う。

「うん、あと術者狩りも人数が減っているみたい。」  
と綾乃は言う。

「じゃあ次の集まる日は二日後ね。」  
と綾乃は言う。とみんなはまた戦いへと戻っていった。

・・・

「悪の・・・顔か・・・」  
とザックスは少し考えていた。

- e n d -

## 第17話（47話）寸前（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

## 第17話（47話）寸前

### 47話

俺はなんとなく自分の家へと帰って一人考え事をしていた。

自分の家が一番落ち着くからだ。

「オリジンパワーを取り合う戦争か・・・そんなために犠牲者を出すなんて・・・」

と俺は思いながらなんとなくテレビをつけてみた。

『現在都内では暴動が起きているため避難勧告が出ています。また捜査に出ていた警察はほとんどが行方不明になっています。そして、成田空港の事件に関しては飛行機がイギリスから来ていることが分かりましたが犯人などは不明です。・・・』

「暴動じゃねえーよ。」

と俺はニュースを見ながら思っていた。

「さてと、行くか。」

と思い俺は外へ出た。

「（そういえば、あの時は外に出たらたくさんの術者狩りが待ち伏せしてたよな。）」

と思っていたが今は誰も居ない。

町を歩いているとコンビニや店は全部営業を中止していて真っ暗になっていた。

「（信じているって・・・俺の何を信じているんだよ・・・）」  
と心の中で思っていた。

すると前から誰かが歩いてきた。

「（あれ・・・なんか見覚えがある・・・）」  
と思っていた。

「久しぶり、ザックス。」  
と前から歩いてくる人が声を掛けてきた。

「そ・・・そんな・・・キリヤ・・・!？」  
と俺は思っていた。

「（いくらなんでもあんなに力を上げているキリヤに勝てるわけが・・・）」  
と思っていた。

「もちろん・・・お前もオリジンパワーを狙っているんだろ・・・」  
と俺は聞く。

「そうだよ。それが目的で来てるんだよ。」  
とキリヤは言う。

なぜストーリーに言えるのかと考えていた。

「私は・・・戦うつもりは無いよ・・・だから場所を教えて・・・」  
とキリヤは言う。

すると無線から

「ザックス・・・ 大変！他のみんなが同一人物に殺されているみたい・・・気を付けて。」  
と綾乃は無線でいう。

「もう会ってんだよ・・・」  
と俺は応答する。

「なあ・・・キリヤ・・・思い出してくれないか・・・ ミイナと一緒に旅をしたよな？」  
と俺は聞く。

「ごめんね、今の私は思い出せないんだ。」  
とキリヤは言う。

「そうだよな・・・ でも話だけは聞いてくれ。 俺たちは旅の途中、ミイナは助けを求めながら俺たちのところへ来たよな・・・ それでミイナの父さんを助けるとき俺が倒れかかっていたよな・・・ その時助けてくれたのはお前じゃないか・・・」  
と俺は言う。

「だから・・・ この私はあの時の私じゃないの！！」  
とキリヤが言う。

「そのお前のどこかにあの時のお前はいねえのかよ！！」  
と俺は言う。

「うるさい！！殺すわよ・・・」  
とキリヤは涙を浮かべながら言う。

「お前が戦うのなら・・・俺も戦うぞ・・・」  
と俺は言う。

「いいわよ・・・ 時空変動・・・吹き飛ばし・・・」  
とキリヤは言う。とザックスを吹き飛ばす・・・

「（っち・・・叶いそうなあいてじゃねえな）」  
と俺は思う。

「ダークインパクト!!」  
と俺は攻撃をする。

「時空変動・・・攻撃封じ!!」  
といいキリヤは攻撃を止める。

「そして時空変動・・・サイクロン!!」  
といいキリヤは勢いを強くしザックスを飛ばす。

・・・

「残りはザックスさんだけか・・・ もうすぐここにも来るのかな・・・」

と綾乃はぼそつと言ってた。

するとミイナが動いているのを綾乃は見た。

「どこ行くのミイナちゃん!？」  
と綾乃は言う。



「これからは神からの悪の力オリジンパワーを使用し人類に罰を与える儀式に入る。

」  
とミイナは言う。

「おい、ミイナ！どうしたんだよ？」  
と透哉も言う

すると気づいたら綾乃と透哉は意識を失い倒れこんでいた。

ミイナは扉を開き外へ出ていく。

・  
・  
・

「ドード様！！大変です。      とうとうオリジンパワーが動き出し  
ましたー！！」  
と一人が言う。

「そうか・・・」  
とドードは言う

「もう長くはないんだな。」  
とドードは小さな声で言った。

・  
・  
・

「キリヤ・・・やっぱり思い出してくれないか・・・」  
と俺は言う。

「……………」

キリヤは無言になった。

「これがあなたの最後よ……時空変動……肉砕き……」  
というときリヤは攻撃をしてくる。

「（こんな技を……つかえたのか……？）」  
とザックスは思っていると辺りは煙で前が見えなかった。

「はっ……ザックス……何をしてるの私は……どうして……  
……どうして……」

ときリヤは小さな声で言った。

煙が消えるとキリヤの目の前にはザックスが居た。

「テ……テイクオーバー……？」

ときリヤは言う。キリヤ達にかけられた呪いが解けたのだ

するとテイクオーバーをしたザックスはキリヤに襲ってきた。

「や……やめて……時空変動……攻撃封じ……ダメだ……  
……効かない……」

ときリヤは言う。

「わ……私はあなたの知っている私なの……だから……」  
ときリヤはいい術が使えなくなった。

「ザックス……聞いて……」  
と襲いかかっていたザックスが急に停まった。

するとザックスはテイクオーバーを戻し

「ミ．．．ミイナ!？」

とザックスは言う。

．．．．

．．．．

大学

「春田．．．どうやら事態はもっと変わったようだ。意外とあの時が早く来たみたいだ。」

とデイビスは言う。

「そうか．．．もう行っても遅いよね？」

と春田は言う。

「あなた．．．全く息子と会ったことがないの．．．？」

と春田は聞く。

「そうだな．．．ここ十数年は．．．でも俺は父親失格だ。息子を実験に使ってしまうぐらいだ．．．」

とデイビスは言う。

「そうね．．．でも私は信じているわよ。あの子を。もしお話し通りに全て進んだらあなたは父親失格じゃないかもしれないわよ？」

と春田は言う。

「どういうことだ？」

とデイビスは言う。

「とりあえず、あなたの息子を信じなさい。それが父親であるためじゃないかしら？」

と春田は言う。

・  
・  
・

「ミ・・・ミイナ・・・なんでお前がここに？」  
と俺は声を掛ける。

俺とキリヤは陽が沈む中道の真ん中で戦っていた。

俺がテイクオーバーをした時はもうキリヤ達の呪いは解けていた。

「これから人類がオリジンパワーに反する行動を私に見せつけたことにより人類に罰を与える。」

と悪の顔を見せたミイナは言う。

「（こ・・・これが悪の顔・・・？）」  
と俺は思う。

綾乃との無線も切れていた。

「おい！オリジンパワーがいたぞ！！」

と一人の術者狩りが見つけ言うதாகたくさんの術者狩りがやってきた。

「よし！すぐに殺せ！！」

ともう一人の術者狩りは言う。

「（こ・・・殺す！？）」

という言葉に俺は反応した。

「儀式を邪魔する者は全て抹殺する。」

とミイナは言う。と飛び込んだ術者狩りは消えて行った。

「（消えた！？）」

と俺は思う。

「お前ら！飛び込め！！」

と一人の術者狩りが言う。とたくさんの術者狩りがミイナのところへ行った。

「（このままじゃ世界が・・・）」

と俺は思い。術者狩りがミイナ達のところへ向かうのを止めようとした。

「てめえーら！！動くんじゃネエ！！」

と俺は術者狩りに言う。

すると術者狩り達はいったん止まった。

「おめえーら・・・今のオリジンパワーに叶うと思ってんのかよ！！」

と俺は言う。

「このままじゃ・・・このままじゃてめえーらは死んでもいいのかよ！？」

と俺は言う。

キリヤは何も知らなかった。だからただ見ていることしかできなかった。

- end -

## 第18話（48話）別世界（前書き）

この小説に出る登場人物の名前は実際の団体名・個人名とは一切関係ありません。

今回も小説を読んでいただきありがとうございます。もしよかったら、評価・感想・お気に入りを宜しくお願いします。

## 第18話（48話）別世界

### 48話

あらずじ

ミイナがオリジンパワーを持っていることを知ってから術者狩り達は全員目的をオリジンパワーに変えイギリスはザックスの仲間だったキリヤ達を呪い日本へ送った。ザックスは大学の春田からオリジンパワーに負担を掛け過ぎると人類・世界が滅亡すると聞かされミイナには負担を掛けないようにした。しかし、キリヤとザックスが戦っている途中にザックスの目の前にミイナが現れた。ミイナはその時から悪の顔という真のオリジンパワーの顔を見せていた。

「このままじゃ・・・このままじゃてめえーらは死んでもいいのかよ!?!」

と俺は言っていると術者狩り達は

「わかってるよ!! だけどこれが俺たちの使命なんだよ! 命まで変えて術を手にしオリジンパワーを手に入れるんだよ! てめえーには何も分からねエよ!」

と術者狩りは言っているとミイナに襲いかかっていった。

「うらあああああ!」

と術者狩り達はミイナに襲いかかる。

「てめえらの・・・てめえらの好きにはさせねえんだよ!!」  
と俺は言っているとテイクオーバーを再びする。

「な・・・何? テイクオーバーだと・・・」

と術者狩り達は言う。

術者狩り達はテイクオーバーの闇の光によって弾き飛ばされる。

「（すごい・・・こんなに強いテイクオーバーは初めてかも・・・）

とキリヤは思う。」

「おい、てめえーら 使命だろうがなんだろうがしらねえが・・・  
簡単に命を捨てるんじゃないネエ。」

と俺は言う。

・・・

「デイベス。最後に息子の顔を見せなくていいのかしら？」  
と春田は言う。

「いいんだよ。あいつは俺のことを思っていないだろう。何も。ま  
しては一緒にいた記憶なんてある訳がない。」  
とデイベスは言う。

するとドアのノックがする音がした。

「どうぞ。」

と春田は言う。

「警視庁の増田だ。デイベス・アンドレスそして春田 南に17年  
前の体内実験を行ったことにより逮捕状が出ている。署まで来ても  
らう。」



と北海道に居た増田は言う。

「そうよね・・・逮捕されるのも当然よね。」  
と春田は増田に声を掛ける。

「悪いがいくら兄弟でもこれだけは見逃せない。デイビス・アン  
ドレスについてはイギリスからも逮捕状が出ている。イギリスのド  
ードも逮捕された。」  
と増田は言う。

「そうか・・・これからは刑務所での生活か・・・」  
とデイビスは言いながら手錠をかけられる。

・・・

俺は術者狩り達を全て排除しこの場にはミイナと俺とキリヤだけに  
なった。

すっかりと陽が沈んで暗くなっていた。しかしミイナから出ている  
黒の光は街灯に灯されはつきりと見えていた。

「ザックス・・・私を今まで守ってくれてありがとう・・・でも・  
・・・これだけは自分でも止められないんだ・・・だから・・・だか  
ら・・・」  
とミイナは言う。

「今は何も言わなくていいんだ。何も考えなくていい。」  
と俺は言うがミイナからの返事はなかった。

「ねえザックス？これって・・・」  
とキリヤは言う。

「そうだな・・・この時が来てしまったんだ。」  
と俺は言う。

俺はミイナをここで殺すべきか行き残すべきか・・・いや、銃で殺そうが術で殺そうが今のミイナには敵う訳がない。ならば何をしたら世界は助かる？世界が助かっててもミイナは助からないのか？それならどっちを選べば・・・

と俺は思っていた。

「人類に罰を与えるまで5分」  
とミイナは言う。

「くっそ・・・」  
と俺は言う。と静かにミイナに銃を向ける。

ミイナは少し目を丸くして銃口を見ていた。

「ザックス？何をしてるの・・・？」  
とキリヤは言う。

「これが・・・最終手段だ・・・」  
と俺は言う。

「え・・・何言ってるの・・・どうしたの？急に。」  
とキリヤは言う。

「うるせえんだ。これが俺の決めた道だ。お前は何もわかんネエだろ。」

と俺は言う。

「ミイナ・・・すまん・・・」

と俺はいい引き金を引こうとしたときキリヤが俺を思いつきり蹴った。

「ぐはっ・・・」

と俺は倒れこむ

するとキリヤがやってきた。

「あんた・・・私に言ったわよね？私が呪われているとき・・・

あれ本当のことを言えば演技だったのよ。あんたがミイナのことをどう思っているかを確かめるためにね。私に言ったわよね？ミイナは私達と一緒に旅をしてきた仲間だって。そんな仲間をここで殺すつもりなの？」

とキリヤは言う。

「・・・」

ザックスは黙り込む。

「もう、ミイナは戻らないかもしれない・・・ここで人類は滅亡するかもしれない・・・私はこれが一番いい選択肢だと思うわ。」  
とキリヤは言う。

「罰を与えるまで3分」とミイナは言う。

「最悪な人生の終わり方だったけどあなたに会えてよかったわ。」  
とキリヤは言う。

「だって一緒に旅してきた仲間なんだから。」

「罰を与えるまで2分」

「みんなそう思っているわよ・・・」

「罰を与えるまで30秒」

「こういうカウントダウンも悪くないわね。」  
と言いながらキリヤはザックスを抱きしめた。

「これで儀式を終了する。これから罰を与える行動を行う。」  
とミイナは言う。

「ミ・・・ミイナアアアアアア!!!」

と俺は叫ぶと辺りは黒い光で包まれ何も見えなくなり気づいたら気を失っていた。

前は何も見えない・・・ 誰も見えない・・・

・・・

・・・

・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・

「（そうか．．．俺は天国にいけんのかな．．． またマリと一緒に生活することができるのかな．．． そんな生活も悪くねえかもな．．． 俺はこれからどうなるんだろう．．．）」

・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・

「こ．．．ここは．．．」

と俺は目を覚ます

「そうか．．．やはり死んだのか．．．」

と俺は小さな声で言ってみた。

辺りが少し見えるようになった。

するとそこは建物が壊れていたりしてたくさんの遺体が転がっていた。

もう朝だった。

「天国ってこんなにグロかったか？」

と俺は疑問に思う。

すると俺の目の前にキリヤとミイナが倒れこんでいた。

「なんでだ．．．どうなってるんだ．．．」

と俺は思う。

俺は急いで2人のところへ行った。

キリヤはあまり息を確認することが出来なかったが確かにキリヤだ。そしてミイナはまだ少し頑張って呼吸をしている。

「ミイナ・・・ミイナ生きてるのか?? ミイナ!!」  
と俺は必死に叫ぶが何も答えてくれない。

「そうか・・・俺は死んでいないのか・・・ 多少傷跡が痛むが・・・ まだ動ける・・・」  
と思いアスファルトが割れかけている道を走る。

「（確か・・・綾乃の家はここらへんに・・・）」  
と綾乃の家へと向かっていったが地下シェルターの入り口が完全に壊れていて入ることが出来なかった。

「ダメだ・・・開かない・・・」  
と俺は思い次の場所へ行く。

今度は裕太たちがいる病院へと向かった。

しかし病院はほとんどが崩れていてこれでは探しようがないと思った。

「世界には・・・俺一人しかいないのか・・・ ここには俺一人しかいないのか・・・」

と俺は思っていた。

「どうすればいいんだよ！！俺はこれから一人でどうすれば！！」  
と俺は思いながら地面に座り込んだ。

・  
・  
・  
・

俺は行く場所もないからとりあえず家へと向かった。

家もほとんどが崩れていて何もなかった。

「住む場所もねえのか・・・」  
と俺は思いながら歩いていた。

すると突然雨が降ってきた。

雨が降ってきたら歩いている途中に少し残っている建物があったからそこで雨宿りすることにした。

「水もでねえか・・・」  
と俺はその建物にあった蛇口を開いてみるが泥水しか流れてこなかった。

「これじゃあ死ぬことになりそうだな・・・」  
と俺は思い椅子に座っていた。

もちろん電気なんて通っていないからテレビなんてつかない。

・  
・  
・  
・

辺りは真っ暗になった。

電気もないから建物の中は真っ暗で何も見えない。

ぼーっと空を見ていた。

「みんなはどこへ行つたんだ・・・」

と俺は思っていると急に空へと光の玉が遠くから飛んでいくのが見えた。

「光の玉・・・？ここには光がないはずだが・・・」

と思っていたら急にふとあることを思い出し俺は走っていった。

- e n d -



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7509x/>

---

ダークマジシャン-2nd stage-

2011年11月22日13時54分発行